『カターサリト・サーガラ』に見られるラーマ物語の歴史的位置

手嶋英貴（京都文教大学）
h-teshima@po.kbu.ac.jp

はじめに

ヴァールミーキに付託される叙事詩『ラーマーヤナ』（*Rāmāyaṇa*）の翻案ものの一つに、ソーマデーヴァ作『カターサリト・サーガラ』（*Kathā-Sarit-Sāgara*、以下『カターサリト』あるいは KSS、11 世紀）第 9 巻に収録された、わずか 50 詩節余りのラーマ物語がある。この作品は、『ラーマーヤナ』のうち後日談にあたる「ウッタラ・カーンダ」の物語を簡略にしたもので、研究者からはこれまでほとんど看過されてきた。本発表では、この『カターサリト』のラーマ物語が有する先行諸作品との関係、および後代諸作品への影響を検討する。

１.『カターサリト』に見られるラーマ物語（KSS 9.1.59-112）

『カターサリト・サーガラ』（*Kathā-Sarit-Sāgara*: KSS、以下『カターサリト』）は、早くに散逸した大説話「ブリハットカター」（*Bṛhatkathā*）のヴァリエーションの一つである。[1] 作者ソーマデーヴァ（Somadeva）は 11 世紀のカシュミール王国に仕えた宮廷詩人とされ、本作品の成立年代も同世紀の後半と目される。そのメインストーリーは、ヴァトサ国の王子ナラヴァーハナダッタ（Naravāhanadatta）が、半神族ヴィディャーダラの王に攫われた最愛の妻マダナマンジュカーを探し求め、ヴィディャーダラ世界の転輪王（諸王の上に立つ帝王）となって彼女を奪い返すまでの冒険譚である。ただしこの物語の特徴は、主人公であるナラヴァーハナが、長い遍歴の途中で数多くのヴィディャーダラの娘と恋仲になり、次々と彼女らを妻にしていく点にある。

さて、くだんのラーマ物語は、そうしたヴィディャーダラ娘の一人、アランカーラヴァティー（Alaṃkāravatī）との恋愛物語の巻（第 9 巻 Alaṃkāravatī-Lambhaka）に現れる。アランカーラヴァティーの母カーンチャナプラバーは、シヴァ神の啓示により、娘がナラヴァーハナと結ばれる運命にあることを知る。当事者の二人も相思相愛となり、いよいよ結婚の運びとなるが、諸事情からその前日にナラヴァーハナはいったん故郷に戻ることになる。ところが、一夜の別れであるにもかかわらず、恋のさなかにある二人は悲しみに沈む。それを見たカーンチャナプラバーは、ラーマとシーターが経験した過酷な別離を引き合いに出して二人を元気づけようとする。

KSS 9.1.57.-58
dṛṣṭvā tau tādṛśau dvāv apy avādīt kāñcanaprabhā |
kim ekarātriviśleṣe hy adhairyaṃ yuvayor idam ‖ 57 ‖
aniścitāvadhiṃ dhīrāḥ sahante virahaṃ ciram |
śrūyatāṃ rāmabhadrasya sītādevyās tathā kathā ‖ 58 ‖

57. カーンチャナプラバーは彼ら二人ともがそのよう［に悲しげ］であるのを見て言った。「一夜の別れに、なぜあなた方にそうした不安があるのか。
58. 意志堅固な人々は、期限も定かでない長期の別れを耐え忍ぶ。幸あるラーマと王妃シーターの、そのような物語を聞きなさい」

こうしてラーマ物語の「後日談」、つまりラーヴァナ征伐の後に続く物語が、彼女によって語りだされる。そしてそこでは、不実の疑いをかけられて森に捨てられたシーターが、長い年月を経てラーマのもとに帰って来る話が展開されることになる。ただし、実際に『カターサリト』が示す挿話は、そのような本意からやや逸脱し、ラーマ夫婦よりむしろラヴァとクシャという二人の少年の活躍を描くことが中心となっていく。以下にその物語の骨格を示した上で、『カターサリト』原典テクストをその和訳とともに紹介する。

物語の骨格

［1］ラーマ物語メインストーリーの概略：	KSS 9.1.59-64
［2］世間の非難を恐れたラーマによるシーターの追放：	KSS 9.1.65-71
［3］シーターによる自らの潔白の証明：	KSS 9.1.72-85
［4］ラヴァの誕生とヴァールミーキによるクシャの創出：	KSS 9.1.86-94
［5］ラヴァによるクベーラ神の庭園からの花盗み：	KSS 9.1.95-99
［6］捕囚となったラヴァのクシャによる救援：	KSS 9.1.100-106
［7］クシャとラーマの対決および和解と譲位：	KSS 9.1.107-112

[1]「ブリハットカター」系説話の概要については、辻［1973: 143-151］を参照のこと。また、諸本の比較を通じて散逸した原型説話の構成を検討したものに土田［2017］がある。同書の第五章（pp. 106-134）には『カターサリト』の年代、特色が論じられ、さらに各巻の梗概が示されている。

原典テクストと和訳

[1] ラーマ物語メインストーリーの概略

59. rājño daśarathasyāsīd ayodhyādhipateḥ sutaḥ /
rāmo bharataśatrughnalakṣmaṇānāṃ purāgrajaḥ //

60. viṣṇor avatatārāṃśo rāvaṇocchedanāya yaḥ /
sītā tasyābhavad bhāryā prāṇeśā janakātmajā //

61. sa pitrā bharatanyastarāyena vidhiyogataḥ /
preṣito 'bhūd vanaṃ sākaṃ sītayā lakṣmaṇena ca //

62. tatra tasyāharat sītāṃ māyayā rāvaṇaḥ priyām /
nināya ca purīṃ laṅkāṃ pathi hatvā jaṭāyuṣam //

63. tataḥ sa rāmo virahī sugrīvaṃ vālino vadhāt /
svīkṛtya mārutiṃ preṣya tatpravṛttim abudhyata //

64. gatvā ca sāgare setuṃ baddhvā hatvā ca rāvaṇam /
laṅkāṃ vibhīṣaṇe nyasya sītāṃ pratyājahāra saḥ //

59. かつて、アヨーディヤーの支配者たるダシャラタ王には、バラタ、シャトルグナ、ラクシュマナの長兄である息子ラーマがいた。

60. ［彼は］ラーヴァナ征伐のために［現れた］ヴィシュヌ神の化身の一部であり、その妻、生命を司る女主人は、ジャナカ王の娘シーターであった。

61. バラタに王位を譲った父により、彼は運命に従って、シーターとラクシュマナと一緒に森へ送られた。

62. そこでラーヴァナが幻術を用いて、彼の愛妻シーターを攫い、そして道中でジャターユスを殺してから、城市ランカーへと連れて行った。

63. それから、［妻を］見失った彼ラーマは、ヴァーリンの殺害によってスグリーヴァを自らの友とし、ハヌマントを［ランカーへ］送って彼女の状況を知った。

64. ［かの地へ］行き、そして海に橋を架け、ラーヴァナを打ち倒し、ランカーをヴィビーシャナに譲ってから、彼はシーターを連れ帰った。

[2] 世間の非難を恐れたラーマによるシーターの追放

65. athāvṛttasya vanataḥ śāsato bharatārpitam /
tasya rājyam ayodhyāyāṃ sītā garbham adhatta sā //

66. tāvac cātra prajāceṣṭāṃ jñātum alpaparicchadaḥ /
svairaṃ paribhramann ekaṃ so 'paśyat puruṣaṃ prabhuḥ //

67. haste gṛhītvā gṛhiṇīṃ nirasyantaṃ nijād gṛhāt /
parasyeyaṃ gṛham agād iti doṣānukīrtanāt //

68. rakṣogṛhoṣitā sītā rāmadevena nojjhitā /
ayam abhyadhiko yo mām ujjhati jñātiveśmagām //

69. iti tadgṛhiṇīṃ tāṃ ca bruvatīṃ taṃ nijaṃ patim /
rāmo rājā sa śuśrāva khinnaś cābhyantaraṃ yayau //

70. lokāpavādabhītaś ca sītāṃ tatyāja tāṃ vane /
sahate virahakleśaṃ yaśasvī nāyaśaḥ punaḥ //

71. sā ca garbhālasā daivād vālmīkeḥ prāpad āśramam /
tena ṛṣiṇā samāśvāsya tatraiva grāhitā sthitim //

65. 次いで、森から帰還して、彼がバラタによって引き渡された王国を支配している時、アヨーディヤーでかのシーターは胎児を身ごもった。

66. そしてその間、臣民の動向を知るために、わずかな供の者を連れて、自由に徘徊するうちに、かの王は一人の男を見た。

67. ［その男は］妻の手を取り、「彼女が他の男の家に行った」という過失の宣告によって、自分の家から追い出しつつあった。

68. 「ラクシャスの家に滞在したシーターは、ラーマ神によって棄てられなかった。親族の家に行った私を捨てるこの人は、［ラーマに］勝る人物だ」

69. と、かの自分の亭主に言っているこの主婦［の言葉］を、かのラーマ王は聞いた。そして心傷つき、宮中に入った。

70. そして、世間の非難を恐れた［ラーマ］は、かのシーターを森に捨てた。名声を持つ者は、別離の苦痛には耐えるが、不名誉には［耐えられ］ないものだ。

71. そして、妊娠によって元気がない彼女は、偶然にヴァールミーキの隠棲処へ辿りついた。この聖仙によって回復させられ、ちょうどその場所に住居を与えられた。

[3] シーターによる自らの潔白の証明

72. nūnaṃ sītā sadoṣeyaṃ tyaktā bhartrānyathā katham /
tad etaddarśanān nityaṃ pāpaṃ saṃkrāmatīha naḥ //

73. vālmīkaḥ kṛpayā cainām nirvāsayati nāśramāt /
etaddarśanajaṃ pāpaṃ tapasā ca vyapohati //

74. tad eta yāvad gacchāmo dvitīyaṃ kaṃcid āśramam /
iti saṃmantrayām āsus tatrānye munayas tadā //

75. tad buddhvā tān sa vālmīkir abravīn nātra saṃśayaḥ /
śuddhaiṣā praṇidhānena mayā dṛṣṭā dvijā iti //

72. 「きっとかのシーターは有責だ。そうでなければどうして夫に捨てられようか。すると、彼女を見ることにより、今や我々に恒常的な罪が及ぶ。

73. またヴァールミーキは憐みから、彼女を隠棲処から追い出さない。そして彼女を見ることで生じる罪を、［彼自身は］タパス（苦行の熱力）によって除去する。

74. ここに汝らは来たれ。ただちに我らはどこか別の隠棲処へ行く」と、その時そこにいた他の苦行者たちは声をかけあった。

75. これを知って、かのヴァールミーキは彼らに言った。「ここに疑わしいことはない。再生族たちよ、私の深い瞑想によって、彼女は潔白であると認識された」

76. tathāpy apratyayas teṣāṃ yadā sītā tadābhyadhāt /
bhagavanto yathā vittha tathā śodhayateha mām //

76. それでも彼らの不信がある［とわかった］時、シーターは発言した。「尊者たちよ、貴方がた知っている仕方で、私を今ここで検査してください。

77. aśuddhāyāḥ śiraśchedanigrahaḥ kriyatāṃ mama /
tac chrutvā jātakaruṇā jagadur munayo ’tra te //

77.［私が］不浄であることによって、私の断頭刑が行われるべきです。これを聞いて、憐憫の情が内に生じた彼ら苦行者たちは、そこで言った。

78. asty atra ṭīṭibhasaro nāma tīrthaṃ mahad vane /
ṭīṭibhī hi purā kāpi bhartrānyāsaṅgaśaṅkinā //

79. mithyaiva dūṣitā sādhvī cakrandāśaraṇā bhuvam /
lokapālāṃś ca tais tasyāḥ śuddhyarthaṃ tad vinirmitam //

78-79.「この森には、ティーティバサラスという名の大きな沐浴場がある。かつてティーティビーというある貞淑な女性が、［妻が］他の男へ耽溺していると疑った夫により誤って非難され、助けのない状態にあった。［彼女は］大地の女神と世界の守護神たちに哀願し、彼らによって彼女が潔白である事実が顕示された。

80.tatraiṣā rāghavavadhūḥ pariśuddhiṃ karotu naḥ /
ity uktavadbhis taiḥ sākaṃ jānakī tat saro yayau //

81.ここで、かのラグの末裔（ラーマ）の若妻は潔白の証明を我々になせ」と述べた彼ら［苦行者たち］と一緒に、ジャナカの娘（シーター）はかの池に赴いた。

81. yady āryaputrād anyatra na svapne ’pi mano mama /
tad uttareyaṃ sarasaḥ pāram amba vasuṃdhare //

81.「もし私の心が、夢にも夫より他にないならば、池のかの向こう岸へ、私は越え渡ろう、母なる大地の女神よ」

82. ity uktvaiva praviṣṭā ca tasmin sarasi sā satī /
nītā ca pāram utsaṅge kṛtvāvirbhūtayā bhuvā //

82.と言って、かの貞女はその池に入った。そして姿を現した大地の女神により、膝に抱かれて向こう岸へと導かれた。

83. tatas tāṃ te mahāsādhvīṃ praṇemur munayo ’khilāḥ /
rāghavaṃ śaptum aicchaṃś ca tatparityāgamanyunā //

83.そこで、彼ら全ての苦行者たちは、貞節なる彼女に敬礼した。そして、彼女を捨てたことへの怒りから、ラグの末裔（ラーマ）を呪詛することを欲した。

84. yuṣmābhir āryaputrasya na dhyātavyam amaṅgalam /
śaptum arhatha mām eva pāpām añjalir eṣa vaḥ //

84.「あなた方によって、夫の不幸が思念されるべきではない。［むしろ］罪ある私を呪詛してください。あなた方にこのとおり手を合わせ［てお願いします］」

85. iti yad vārayām āsa sītā tān sā pativratā /
tena te munayas tuṣṭās tasyāḥ putrāśiṣaṃ daduḥ //

85.と、夫に忠実なかのシーターが彼らを押しとどめたことで、かの苦行者たちは満足して、彼女に息子［の出産］への祝福を与えた。

[4] ラヴァの誕生とヴァールミーキによるクシャの創出

86. tataḥ sā tatra tiṣṭhantī samaye suṣuve sutam /
taṃ ca nāmnā lavaṃ cakre sa vālmīkimuniḥ śiśum //

86.それから、彼女はそこに滞在し、適切な時期に一人の息子を出産した。そして苦行者ヴァールミーキは、その子にラヴァという名を与えた。

87. bālam ādāya taṃ tasyāṃ gatāyāṃ snātum ekadā /
tena śūnyaṃ taduṭajaṃ dṛṣṭvā so ’cintayan muniḥ //

87.ある日、彼女がその子を抱いて沐浴に行った時のこと、かの苦行者（ヴァールミーキ）は木の葉作りの小屋に彼（ラヴァ）がいないのを見て思った。

88. sthāpayitvārbhakaṃ yāti snātuṃ sā tat kva so 'rbhakaḥ /
nītaḥ sa śvāpadeneha nūnam anyaṃ sṛjāmi tat //

88-89ab.「彼女は［いつも］坊やを置いて沐浴しに行く。さてその坊やはどこにいる。今や彼は獣に連れ去られた。では直ちに別の［坊や］を創り出そう。さもないと、沐浴して戻ってきたシーターは［悲しみのために］この世で命を保てないだろう」

89. snātvāgatānyathā sītā na prāṇān dhārayed iha /
iti dhyātvā kuśaiḥ kṛtvā pavitraṃ nirmame ’rbhakam //

89cd-90ab. と考え、クシャ草を材料にパヴィトラ［に等しい］、我欲を離れてラヴァに似た坊やを作った。こうして、かの苦行者はそれを［家に］置いた。

90. lavasya sadṛśaṃ taṃ ca sa tathāsthāpayanmuniḥ /
āgatā taṃ ca sā dṛṣṭvā muniṃ sītā vyajijñapat //

90cd-91. そして戻って来たシーターはそれを見て、苦行者に告げた。「私自身の子はこのとおりいます。さて、この別の［子］はどこから［きたのですか］、苦行者よ」。これを聞いて、かの苦行者は出来事をありのままに話し、彼女に言った。

91. svako ’yaṃ me sthito bālas tad eṣo ’nyaḥ kuto mune /
tac chrutvā sa yathāvṛttam uktvā munir uvāca tām //

92. bhavitavyaṃ gṛhāṇaitaṃ dvitīyam anaghe sutam /
kuśasaṃjñaṃ mayāyaṃ yat svaprabhāvāt kuśaiḥ kṛtaḥ //

92.「瑕疵なき女よ、第二の息子となるべきこれを受けよ、クシャという［子］を。［sono名は］これが私により、自らの超能力でクシャ草から作られたこと［に由来する］。

93. ity uktā tena muninā sītā lavakuśau sutau /
tenaiva kṛtasaṃskārau vardhayām āsa tatra tau //

93.かの苦行者（ヴァールミーキ）にそう言われたシーターは、ほかならぬ彼により人生儀礼が執り行われた二人の息子、ラヴァとクシャを、その地で成長させた。

94. bālāveva ca tau divyamastragrāmamavāpatuḥ /
vidyāś ca sarvā vālmīkamuneḥ kṣatrakumārakau //

94.そして、幼児でしかない彼ら二人のクシャトリヤ男児は、数多の天の武器［の用法］、およびすべての学問を、ヴァールミーキから修得した。

[5] ラヴァによるクベーラ神の庭園からの花盗み

95. ekadā āśramamṛgaṃ hatvā tanmāṃsam ādatuḥ /
arcāliṅgaṃ ca vālmīkeś cakratuḥ krīḍanīyakam //

95. ある時二人は、隠棲処の鹿を殺して、その肉を食べた。さらに、ヴァールミーキにとっての崇拝対象であるリンガをおもちゃにした。

96. tena khinno muniḥ so 'tha sītādevyānunāthitaḥ /
prāyaścittaṃ tayor evam ādideśa kumārayoḥ //

96. そのためにかの苦行者は憔悴したが、王妃シーターによって懇願され、かの男児たちにとっての贖罪を、次のように指示した。

97. gatvā kuberasarasaḥ svarṇapadmāny ayaṃ lavaḥ /
tadudyānāc ca mandārapuṣpāṇy ānayatu drutam //

97.「ここにいるラヴァは［目的地へ］行って、クベーラ神の池から金の諸々の蓮を、さらに彼の庭園から諸々のマンダーラの花を、速やかに持ってきなさい。

98. tair etau bhrātarāv etal liṅgam arcayatām ubhau /
tenaitayor idaṃ pāpam upaśāntiṃ gamiṣyati //

98. それら（所定の花々）によって、この兄弟二人は、かのリンガを崇拝しなさい。そうすることで、この二人のこの罪は沈静に至るであろう」

99. etac chrutvaiva kailāsaṃ sa bālo 'pi lavo yayau /
ācaskanda kuberasya saraś copavanaṃ ca tat //

99. これを聞くや、幼童でありながらも、かのラヴァはカイラーサ山に行った。クベーラの池と［それに］付属する園林とを襲撃した。

[6] 捕囚となったラヴァのクシャによる救援

100. nihatya yakṣān ādāya padmāni kusumāni ca /
āgacchan pathi sa śrānto viśaśrāma tarostale //

100. ヤクシャたちを打ち倒し、諸々の蓮と諸々の花を取って帰って来る途上で、疲れた彼は、二本の樹の［根方の］平たい部分で休息した。

101. atrāntare ca rāmasya naramedhe sulakṣaṇam /
cinvan puruṣam āgacchat tena mārgeṇa lakṣmaṇaḥ //

101. さてこの間に、ラクシュマナが、ラーマのプルシャメーダ（人間犠牲祭）で［供犠にするため］の、吉祥な徴を持った人間を探しながら、その道をやって来た。

102. sa lavaṃ samarāhūtaṃ mohanāstreṇa mohitam /
kṣatradharmeṇa baddhvā tamayodhyāmanayatpurīm //

102. クシャトリヤの法に則って戦闘に呼びかけられ、［相手を］麻痺させる武器によって麻痺させられたラヴァを、彼は縛り、アヨーディヤーの町へ連れて行った。

103. tāvac ca sītām āśvāsya lavāgamanaduḥsthitām /
vālmīkaḥ svāśrame tatra jñānī kuśam abhāṣata //

103. そしてその間、智者ヴァールミーキは、ラヴァの帰還について苦境に見舞われたシーターを元気づけて、その自らの隠棲処にいるクシャに語った。

104. nīto 'yodhyām avaṣṭabhya lakṣmaṇena suto lavaḥ /
gaccha mocaya taṃ tasmād ebhir astrair vinirjitāt //

104.「子たるラヴァはラクシュマナによって捕囚にされ、アヨーディヤーに連れて行かれた。行け。これらの武器によって打ち勝つことで、彼をそこから解放せよ」

105. ity uktvā dattadivyāstras tena gatvā kuśas tataḥ /
rodhyamānām ayodhyāyāṃ yajñabhūmiṃ rurodha saḥ //

105. と言って、クシャは神的な武器を与えられ、それをもってそこから行って、［敵軍を］攻め立てつつ、彼はアヨーディヤー内の祭場を攻め立てた。

106. jigāya lakṣmaṇaṃ cātra tannimittaṃ pradhāvitam /
yuddhe divyair mahāstrais tais tato rāmas tam abhyagāt //

106. そしてそこでの戦闘で、彼の目標たる、前に駆け出たラクシュマナを、かの諸々の神的な大いなる武器によって打倒した。そこでラーマが彼に向って行った。

[7] ラーマと二児の和解および譲位

107. so 'pi prabhāvād vālmīker jetuṃ nāstraiḥ śaśāka tam /
kuśaṃ yattena papraccha ko 'rthas te ko bhavāniti //

107. ヴァールミーキの超能力により、彼（ラーマ）も諸々の武器によって彼に勝ち得なかったことから、クシャに「君の目的は何か、あなたは誰なのか」と尋ねた。

108. kuśas tato 'bravīd baddhvā lakṣmaṇenāgrajo mama /
ānīta iha tasyāhaṃ mocanārthamihāgataḥ //

109. āvāṃ lavakuśau rāmatanayāviti jānakī /
mātā nau vakti cety uktvā tadvṛttāntaṃ śaśaṃsa saḥ //

108-109. するとクシャは言った。「ラクシュマナが縛って、わが長兄はここに連れて来られた。私は彼の解放のためにここへ来た。我らはラヴァとクシャ、ラーマの嗣子だ」と言い、また「母たるジャナカの娘が我らに語っている」と言って、その人（シーター）に起きた諸々の出来事を、彼（クシャ）は彼に語った。

110. tataḥ sabāṣpo rāmastaṃ lavamānāyya tāvubhau /
kaṇṭhe jagrāha saiṣo 'haṃ pāpo rāma iti bruvan //

110. するとラーマは涙を流して、かのラヴァを［そこに］連れてこさせ、彼ら二人を［自分の］首元に抱きしめ、彼は「私がその罪深きラーマだ」と言った。

111. atha sītāṃ praśaṃsatsu vīrau paśyatsu tau śiśū /
paureṣu militeṣv atra sa tau rāmo 'grahītsutau //

111. その時、群がった市民らがシーターを称賛し、英雄であるかの二人の子供を見ているその中で、彼ラーマはその二人を息子として受け入れた。

112. ānāyya sītādevīṃ ca vālmīker āśramāt tataḥ /
tayā saha sukhaṃ tasthau putranyastabharo 'tha saḥ //

112. そして、ヴァールミーキのかの隠棲処から王妃シーターを連れて来て、彼女とともに幸福に暮らした。そして彼は息子に職務を委譲した。

２.『ラーマーヤナ』ウッタラカーンダ（第７巻）との比較

『ラーマーヤナ』(*Rāmāyaṇa*: Rm)[2] の現行テクストは７巻からなっており、本稿でいうメインストーリーは、その第 1 巻から第 6 巻までにあたる。つまり、ラーマ誕生のいきさつからシーターとの結婚まで（第 1 巻)、父王ダシャラタの側室カイケーイーの讒言によるラーマ夫妻の追放(第 2 巻)、魔王ラーヴァナによる愛妃シーターの誘拐(第 3 巻)、猿王スグリーヴァの戦いへのラーマによる加勢、および猿たちによるシーターの捜索（第 4 巻)、猿の戦士ハヌマントによるランカー島での捜索とシーターの発見（第 5 巻)、ランカー島に渡ったラーマによるラーヴァナの討伐、そしてシーターを伴っての故郷アヨーディヤーへの凱旋（第 6 巻）といった、ラーマの「王子」時代の行状譚である。これに対し、第 7 巻「ウッタラ・カーンダ」(*Uttara-Kāṇḍa*「後続の巻」)[3] は、ラーマが父の後を継いで「国王」となった後の物語である。まず、その概略を紹介しておく。

『ラーマーヤナ』「ウッタラ・カーンダ」の概略

[I] ラーマの即位とアヨーディヤーの統治（Rm 7.1-42）:
ラーヴァナ討伐を終えたラーマは、シーターとともにアヨーディヤーへ帰還し、国王に即位する。その後は順調に統治を続け、シーターとともに幸せに暮らす。

[II] 世間の非難を恐れたラーマによるシーターの追放（Rm 7.42-47）:
ある日ラーマは、臣民の間で、シーターが誘拐されている間にラーヴァナと不義の関係にあったのではないかという噂が起きていることを知る。ラーマは自らの統治に悪影響が生じることを恐れ、弟のラクシュマナに命じてシーターを森に捨てさせる。

[III] シーターによる双子の男児クシャとラヴァの出産（Rm 7.48-58）:
当時ラーマの子を身ごもっていたシーターは、ヴァールミーキに拾われて、彼の隠棲所で双子を出産する。一方をクシャ草、他方をラヴァ草で清めたことから、双子をクシャとラヴァと命名する。

[IV] ラーマによる統治とアシュヴァメーダの開始（Rm 7.59-83）:
シーターを捨てた後、アヨーディヤーをつつがなく統治していたラーマは、強力な王のみが挙行しうるアシュヴァメーダ（馬犠牲祭）[4] を開始する。

[V] クシャとラヴァによるラーマの面前での『ラーマーヤナ』吟唱（Rm 7.84-85）:
いっぽう双子は、ヴァールミーキから、彼が創作する『ラーマーヤナ』をヴィーナー（インドのリュート）[5] の弾き語りにより吟唱する技法を学ぶ。そしてヴァールミーキは、双子を伴ってアシュヴァメーダ祭場へ赴き、ラーマの前で双子に『ラーマーヤナ』を吟唱させる。

[VI] シーターによる自らの潔白の証明（Rm 7.86-88）:
彼らの歌を聴きながら、ラーマはクシャとラヴァが自身の子であること、そしてシーターが森で生き延びていることに気づく。そこでラーマはシーターを呼び寄せ、公衆の前で彼女が無実を証明するよう命じる。シーターは自らの潔白を証すため、大地の女神に抱かれ地中へ帰入するという奇跡を起こす。

[VII] クシャとラヴァへの譲位およびラーマの昇天（Rm 7.89-100）:
妻を失ったラーマは深い悲しみを抱きつつアシュヴァメーダを完遂し、その後は二人の息子とアヨーディヤーで暮らす。やがて自らの領土のうち、コーシャラ国をクシャに、北の国をラヴァに分与したのち余生を過ごす。そして逝去した後は、自身の本源であるヴィシュヌ神へと帰入していくことになる。

Rm 7.1-100	KSS 9.1.59-112
[I] ラーマの即位とアヨーディヤーの統治	[1] ラーマ物語メインストーリーの概略
[II] 世間の非難を恐れたラーマによるシーターの追放	[2] 世間の非難を恐れたラーマによるシーターの追放
[III] シーターによる双子の男児クシャとラヴァの出産	[3] シーターによる自らの潔白の証明（池渡り）
[IV] ラーマによる統治とアシュヴァメーダの開始	**[4] ラヴァの誕生とヴァールミーキによるクシャの創出**
[V] クシャとラヴァによるラーマの面前での吟唱	**[5] ラヴァによるクベーラ神の庭園からの花盗み**
[VI] シーターによる自らの潔白の証明（大地への帰入）	**[6] 捕囚となったラヴァのクシャによる救援**
[VII] クシャとラヴァへの譲位およびラーマの昇天	[7] ラーマと二児の和解および譲位

---

[2] 本稿における『ラーマーヤナ』原典の引用・参照、およびそれにともなうテクスト番号表示は Baroda 批評校訂版に基づく。各巻の内容についてはヴィンテルニッツ［1965: 181-199］、および Brockington［1998: 34-40］にある要約を参照のこと。

[3] 「ウッタラ・カーンダ」の編纂年代は、『ラーマーヤナ』全体の成立過程（Brockington 1998: 34 の推測によれば紀元前 500 年から紀元後 300 年の間の数世紀）のうち最終段階に位置づけられる。「ウッタラ・カーンダ」の成立に関する諸研究について、Brockington［1998: 391-397］を参照のこと。

[4] アシュヴァメーダの式次第については、Hillebrandt［1897: 149-153］と Keith［1925: 343-347］の解説を参照のこと。ヴァージャサネーイン派（白ヤジュルヴェーダ）の規定に基づく祭祀全体の記述研究として Dumont［1927］がある（付録に黒ヤジュルヴェーダ諸派のシュラウタスートラからアシュヴァメーダ部分を抜き出したフランス語訳を含む)。

[5] 古代インドの浮彫彫刻等から確認されるヴィーナーの形状等については Zin［2004］を、またパーリ仏典とその註釈文献に基づくヴィーナーとその表象を論じたものとして林［2011］を参照のこと（両論文は主要な先行研究の紹介を含む点でも有益である)。

「ウッタラ・カーンダ」の物語を、その翻案作品である『カターサリト』のラーマ物語と比較すると、両者には多くの相違がみられる（下表参照）。エピソードの大まかな区切りごとに見ると、世間の非難を恐れたラーマがシーターを追放する話（Rm［II］と KSS［2］）、および「シーターが大地の女神を呼び出して自らの潔白を証明する話」（Rm［VI］と KSS［3］）は、細部の設定（後者についてはそれが置かれている文脈）が異なるものの、概ね同じエピソードを示している。

しかし、シーターとラーマの間に生まれる息子たちが登場する部分（表中の**太字箇所**）で、『カターサリト』のラーマ物語には、『ラーマーヤナ』にない独自要素が多い。まず息子たちの出生譚が大きく異なる。『ラーマーヤナ』では彼らが「双子」として生まれることになっているが『カターサリト』では、最初シーターがラヴァのみを出産する（KSS 9.1.86-87）。そしてクシャは後日、ヴァールミーキ仙がクシャ草で編んだ人形に命を吹き込んで創出することになっている（KSS 9.1.88-90）。その他にも、リンガを玩んだ償いにラヴァがクベーラ神の園から蓮等の花を盗んで来る話（KSS 9.1.95-99）、ラクシュマナがプルシャメーダの犠牲としてラヴァを捕える話（KSS 9.1.100-102）など、この作品固有の筋書きが目立つ。

以下では、クシャとラヴァのエピソードが、『ラーマーヤナ』の段階から『カターサリト』中の物語まで、どのように発展してきたか、その経緯を辿る。

３．吟唱楽人としてのクシャとラヴァ

3.1『ラーマーヤナ』が示すクシャとラヴァの特徴

『ラーマーヤナ』が示すクシャとラヴァの役割は、ラーマに対し、自分たちが息子であり、またシーターが森で生きているという事実を報せることにある。つまり、ラーマがシーターを森から呼びよせ、その貞潔を公衆の前で証させるという終盤の「見せ場」を生む契機として、二人の登場は位置づけられる。しかし、実際の双子の描写には、そうした役割の枠を超える、付加的とも見える要素が含まれる。以下では、彼らを描く詩節をいくつか抜き出して、人物像の特徴を確認していく。

『ラーマーヤナ』吟唱の具体的描写　まず、双子による『ラーマーヤナ』吟唱の場面が、ストーリー中のどの位置に現れるかを見ておく。森の隠棲処で生まれたクシャとラヴァは、ヴァールミーキから『ラーマーヤナ』の吟唱とヴィーナーの奏楽技術を教え込まれる。そしてちょうどその頃、彼らの父ラーマが、帝王のみが行う壮麗な祭祀アシュヴァメーダ（馬犠牲祭）を挙行する。以下のパッセージでは、ラーマのアシュヴァメーダが始まってから、ヴァールミーキと双子がその祭場へとやってくることが述べられる。

Rm 7.83.16-84.1

īdṛśo rājasiṃhasya **yajñaḥ** sarvaguṇānvitaḥ |	16. 王中の獅子たるラーマの、全ての要件を具えたこのような［アシュヴァメーダの］**祭祀が、一年間**、欠けることなく完全に**行われる**。
saṃvatsaram atho sāgraṃ **vartate** na ca hīyate ‖ 16 ‖	
vartamāne tathābhūte yajñe paramake ’dbhute |	1. このような、いまだかつてない最高の祭祀が行われている時、優れた苦行者であるヴァールミーキが、弟子（クシャとラヴァ）を伴ってやって来た。
saśiṣya ājagāmāśu vālmīkir munipuṃgavaḥ ‖ 1 ‖	

ここで祭祀の期間が「一年間」（*saṃvatsaram*）と言われていることは注目に値する。ヴェーダ文献の規定によれば、アシュヴァメーダの本祭自体は三日間で終わるものであり、この詩節の表現に合致しない。ただし、それに先立つ準備祭の期間は、まさしく丸一年として規定されている。よく知られているように、アシュヴァメーダで供犠にされるべき馬は、本祭の一年前にいちど祭場から解き放たれる。そして祭主である王の軍勢に護られながら、他国の領土を含めて大地を自由に放浪する。[6] いっぽう馬が出発した後の祭場では、その後一年にわたって、所定の祭事からなるアシュヴァメーダの準備祭が毎日行われる。上掲のパッセージは、その準備祭をしているところへ、双子が師に伴われてやってきたことを述べているわけである。

さて、その後に続くパッセージでは、ヴァールミーキが双子に『ラーマーヤナ』吟唱の場所について指示する様子が描かれる。

Rm 7.84.3-5

sa śiṣyāv abravīd dhṛṣṭo yuvāṃ gatvā samāhitau |	3. 歓喜せる彼は二人の弟子に言った：「汝らは行って、精神を集中し、最上の喜びをもって、美文芸『ラーマーヤナ』の全てを歌いなさい。
kṛtsnaṃ rāmāyaṇaṃ kāvyaṃ gāyatāṃ parayā mudā ‖ 3 ‖	
ṛṣivāṭeṣu puṇyeṣu brāhmaṇāvasatheṣu ca |	4. 聖仙たちの吉祥なる囲いの中（祭場内）で、バラモンたちの宿舎で、戦車が行き来する王の通り道ないしその家々で、
rathyāsu rājamārgeṣu pārthivānāṃ gṛheṣu ca ‖ 4 ‖	
rāmasya bhavanadvāri **yatra karma ca vartate** |	5. ラーマの王宮の門で。そして、**とりわけ祭事が行われる所で、かつ聖仙たちの目の前でこそ、汝らは歌いなさい**」
ṛtvijām agrataś caiva tatra geyaṃ viśeṣataḥ ‖ 5 ‖	

[6] 「アシュヴァメーダの馬は一年間自由に放浪する」といった説明がよくなされてきたが、ヴェーダ諸文献の規定を見ると、馬の放浪期間は必ずしも一年と限らない。例えば、ŚB（13.4.2.16）、Śāṅkhāyana-ŚS（16.1.15）、Lāṭyāyana-ŚS（9.9.5, 15）、Drāhyāyana-ŚS（27.1.6-7, 20）は一年間とするが、Āpastamba-ŚS（20.7.7）と Hiraṇyakeśi-ŚS（14.2.20）は馬を解き放った後「十一か月後」に馬を繋ぐとする。さらに Vādhūla-ŚS（11.4.1.1 in ed. Ikari-Teshima、手嶋 2012: 312 参照）は「六か月後」に繋ぐよう規定する。総じて、黒ヤジュルヴェーダ文献は馬を解き放ってから一年以内のある時期に放浪を終わらせ、それ以外の諸派は一年間の放浪を想定する傾向にある。馬の放浪の実際と、その基礎にある観念については手嶋［2012］を参照のこと。

アシュヴァメーダの開催地には、祭官として招かれた大勢のバラモン、そして参列者として招かれた同盟諸国の王たちが滞在している。ヴァールミーキは、こうした祭場周辺にある彼らの居留地だけでなく、「とりわけ（*viśeṣataḥ*）聖仙たちが集う祭場で」『ラーマーヤナ』を歌うように指示している（上記文例の太字部分）。[7] さらにその吟唱が弦楽器、つまりヴィーナーの弾き語りとして行われることも、次のパッセージから明らかである。

Rm 7.84.12&14
imās **tantrīḥ** sumadhurāḥ sthānaṃ vāpūrvadarśitam |
mūrchayitvā sumadhuraṃ gāyetāṃ vigatajvarau ‖ 12 ‖
tad yuvāṃ hṛṣṭamanasau śvaḥ prabhāte samādhinā |
gāyetāṃ madhuraṃ geyaṃ tantrīlayasamanvitam ‖ 14 ‖

12.「これら甘美な音色をもつ［ヴィーナーの］**弦を**、あるいはかつて知られたことがないほど甘美な声音を**響かせ**、苦悩の去った汝らは歌いなさい。14. そこで翌日、朝早く、汝らは心喜び精神統一して、弦の爪弾きを伴った甘美な歌を歌いなさい」[8]

もう一つ注目すべきは、双子の容姿がラーマと瓜二つであることに人々が驚く様子も描かれていることである。[9] ここに、二人がラーマの実子であり、正統の後継者であることが印象づけられる。じっさい「ウッタラ・カーンダ」の末尾では、ラーマの引退に合わせて、成人となった双子がそれぞれに領国を譲られることになる。双子が「ラーマに瓜二つ」であることの強調は、そうした結末への布石になっていると言えよう。

全体として、クシャとラヴァは、シーターを森から呼び戻すきっかけの作り手として、またラーマの王統を継ぐ者として、「ウッタラ・カーンダ」の物語展開に必要な存在である。しかし、それが「双子」であるべき理由は、物語構成上は見出すことができない。また、上に見てきた通り、彼らは「吟唱楽人」として登場し、三つの条件のもとで『ラーマーヤナ』を歌うことになっている。つまり、（1）アシュヴァメーダの準備祭の期間に、（2）とりわけアシュヴァメーダの祭場で、（3）かつヴィーナーの弾き語りをする形で、彼らは吟唱するというのである。では、クシャとラヴァの「吟唱楽人」という人物像は、どこから生まれたのだろうか。

3.2　人物像の起源：ヴェーダ文献に見られる「二人の吟唱楽人」

じつは、アシュヴァメーダの式次第を記したヴェーダ文献を参照すると、彼らが二人一組として、また吟唱楽人として描かれた理由が見えてくる。先に触れたように、アシュヴァメーダでは供犠にされるべき馬を解き放った後、祭主である王は一年間の潔斎に入る。その同じ期間、日に三回あるイシュティ（*iṣṭi-*、穀類を原料とする献供祭）を中心に、いくつかの祭事を組み合わせる形で、アシュヴァメーダの準備祭[10] が毎日行われる。ブラーフマナやシュラウタスートラの説明によれば、それらの祭事の一つとして、二人のヴィーナーガーティン（*vīṇāgāthín-*、ヴィーナーを奏でて歌う者）が、祭主である王を称えて毎日歌うことになっている（下記文例の太字部分）。[11] その儀礼的意味あいを、『シャタパタ・ブラーフマナ』（*Śatapatha-Brāhmaṇa Mādhyandina*: ŚB）は次のように説明する。

---

[7] ちなみに、Rm 7.84.8 は歌い始めるタイミングを次のように述べる：yadi śabdāpayed rāmaḥ śravaṇāya mahīpatiḥ / ṛṣīṇām upaviṣṭānāṃ tato geyaṃ pravartatām //（もし大地の主ラーマが［汝らを、歌唱の］聴聞のために呼ぶなら、聖仙たちが［各々の］座に着いたその時に、歌唱は上演されるべきである。）ここで聖仙たちの所作を表す *upa√viś-*は、ヴェーダ文献において、祭官が祭場内の所定の座に着くことを示す一般的な動詞である。Cf. ŚB 13.4.3.2（アシュヴァメーダのパーリプラヴァ説話朗誦の規定）：**samúpaviṣṭeṣv** adhvaryúḥ saṃpréṣyati hótar bhūtāny ā́ cakṣva bhūtéṣv imáṃ yájamānam ádhy ūhéti.（［祭官たちが］**みな座に着いた時**、アドヴァリュ祭官は促す「ホータルよ、諸事物を物語れ、この祭主を諸事物の上に高めよ」と。）

[8] 『ラーマーヤナ』以来、苦行者ヴァールミーキの弟子であるクシャとラヴァは、彼ら自身も年少の苦行者として描かれている。上記の引用詩節にある「苦悩を離れた」（*vigatajvarau*）、「精神統一して」（*samādhinā*）といった修飾語はそのことを反映している。Cf. 後出 URC 5, v. 3: *munijanaśiśu-*「苦行者の子供」、PdP 5.66.139: *atinirmala-*「大変無垢な」、KSS 9.1.89: *pavitraṃ nirmame ṛbhakam*「パヴィトラ［に等しい］、我欲［という汚れ］を離れた坊や（クシャ）」。

[9] Rm 7.85.6-8: hṛṣṭā ṛṣigaṇās tatra pārthivāś ca mahaujasaḥ | pibanta iva cakṣurbhyāṃ rājānaṃ gāyakau ca tau ‖ 6 ‖ parasparam athocus te sarva eva samaṃ tataḥ | ubhau rāmasya sadṛśau bimbād bimbam ivoddhṛtau ‖ 7 ‖ jaṭilau yadi na syātāṃ na valkaladharau yadi | viśeṣaṃ nādhigacchāmo gāyato rāghavasya ca ‖ 8 ‖（6. そこで、歓喜せる一群の聖仙と、大威力をもつ王侯たちは、両目で飲み込むかのように、王（ラーマ）と彼ら二人の歌い手を［凝視した］。7. さて、そこで彼ら全員がひとしく互いに言い合った。「鏡から、そこに映る像が取り出されたように、二人はラーマにそっくりだ。8. もし［林住者の徴である］束髪がなければ、もし樹皮の衣服をまとっていなければ、我々は歌っている二人とラグの末裔（ラーマ）の区別をつけることができない」なお、GautDhS 3.34、BaudhDhS 2.11.15、VasDhS 9.1 では、林住者の衣服について **"jaṭilaś cīrā**jinavāsāḥ"（**束髪、樹皮**もしくは獣皮の衣服が［用いられる］）という共通の規定文が示される。Cf. MānDhŚ 6.6: vasīta carma **cīraṃ** vā sāyaṃ snāyāt prage tathā / **jaṭāś** ca bibhṛyān nityaṃ śmaśrulomanakhāni ca //（［林住者は］獣皮あるいは**樹皮**を着るべきである。夕に、同じく朝にも、沐浴するべきである。そして常に、**束髪**、髭、体毛、爪を［切らずに］保持するべきである。）なお、*cīra-*という語は樹皮だけでなく、布のぼろ着をも指しうる。『マヌ法典』注釈者たちの多くは樹皮とするか、あるいは樹皮とともにぼろ布を意味する可能性を示す（Olivelle［2005: 288］を参照）。Cf. GautDhS 3.34、ĀpDhS2.22.1、BaudhDS 2.11.15、VasDhS 9.1。

[10] アシュヴァメーダ準備祭の詳細については Dumont［1927: 23-102］（ヴァージャサネーイン派規定による記述）および Teshima［2008］（全ヴェーダ学派の規定に基づく記述と分析）を参照のこと。

[11] どのヴェーダ文献でも、一年にわたるアシュヴァメーダの準備祭の中には、祭主である王を称揚する「説話朗誦」の儀礼が必ず規定される。ただし、その具体的な形式に概ね二つある。一つはヴィーナーガーティンによる説話の吟唱であり、もう一つはホータル祭官による「パーリプラヴァ」と呼ばれる説話シリーズの朗誦である。文献によってどちらを採用するかに違いが見られるが、ŚB など両タイプを接合した複雑な儀礼を規定する文献も複数ある。詳しくは手嶋［2000］を参照のこと。古代インドの吟唱詩人とヴィーナーガーティンとの関連について、cf. Horsch［1966: 421-422］。

ŚB 13.1.5.1-3

… brāhmaṇáu **vīṇāgāthínau saṃvatsaráṃ gāyataḥ** śriyái vā́ etád rūpám yád vī́ṇā śríyam evā̀smiṃs tád dhattaḥ ‖ 1 ‖ tád āhuḥ | yád ubháu brāhmaṇáu gā́yetām ápāsmāt kṣatráṃ krāmed bráhmaṇo vā́ etád rūpáṃ yád brāhmaṇó na vái bráhmaṇi kṣatrā́m̐ ramata íti ‖ 2 ‖ yád ubháu rājanyàu | ápāsmād brahmavarcasáṃ krāmet kṣatrásya vā́ etád rūpáṃ yád rājanyò na vái kṣatré brahmavarcasā́m̐ ramata íti brāhmaṇò 'nyó gā́yati rājanyò 'nyó bráhma vái brāhmaṇáḥ kṣatrā́m̐ rājanyàs tád asya bráhmaṇā ca kṣatréṇa cobhayátaḥ śrī́ḥ párigṛhītā bhavati ‖ 3 ‖

1. … **二人の**バラモンの**ヴィーナーガーティンが、一年間歌う**。ヴィーナーとはシュリー（王権の威光）が形をとったものなのだ。こうして、二人はこの者（祭主である王）にシュリーを置くことになる。2. これについて次のように言われる：「二人のバラモンが歌うと、この者からクシャトラ（支配力）が出て行くことになる。バラモンとはブラフマン（聖なる言葉）が形をとったものなのだ。［そして］ブラフマンにはクシャトラが安住しないのである。3. 二人の王族が歌うと、この者からブラフマヴァルチャス（聖なる言葉がもつ呪力）が出て行くことになる。王族とは、クシャトラが形をとったものなのだ。［そして］クシャトラにはブラフマヴァルチャスが安住しないのである」と。［それゆえ］バラモンと王族の両者が歌う。バラモンはブラフマン、王族はクシャトラ［の表象］なのだ。こうして、ブラフマンとクシャトラによって、彼（祭主）のシュリーは両側から保持される。

つまり、ヴィーナーは王権に具わる威光「シュリー」（*śrī́-*）をかたどったものであり、その奏者が「二人」であることには、シュリーを両側から保持し安定させる、という意味あいが込められている。楽人の構成については異説があったらしく、上の文例ではまず「二人ともバラモン」とする説を挙げているが、最終的には文例中で述べられた理由から、「バラモンと王族一人ずつ」という組み合わせを正説としている。『シャタパタ・ブラーフマナ』はさらに、二人が歌うべき歌詞の内容と、その儀礼的意味合いを次のように説明する。

ŚB 13.1.5.6

íty ayajatéty adadād íti brāhmaṇó gā́yatīṣṭāpūrtáṃ vái brāhmaṇásyeṣṭāpūrténaivàinaṁ sá sám ardhayatī́*ty ayudhyatéty amúṁ̀ saṃgrāmám ajayad* íti rājanyò yuddháṃ vái rājanyàsya vīryàṃ vīryènaivàinaṁ sá sám ardhayati … ‖ 6 ‖

6. バラモンが「［祭主である王は］『……』といった祭祀を行った。『……』といった［祭官への報酬］を贈った」と歌う。祭祀挙行の効力（*iṣṭāpūrtá-*）[12] はバラモンに属するのだ。こうして、彼（バラモンの楽人）はこの者（祭主）に祭祀挙行の効力を授けることになる。王族が「［祭主である王は］『……』といった戦いをした。『……』というかの会戦で勝った」と歌う。戦い、つまり勇力は王族に属するのだ。こうして彼（王族の楽人）はこの者（祭主）に勇力を授けることになる。……

ここでは祭主たる王の事績を、彼が挙行した「祭祀」および勝利した「会戦」という二つのトピックに分けて謳いあげることが規定されている。ただし、実際に行った祭祀や会戦は祭主ごとに異なるため、歌詞はその実態に合わせて創作されることになる。ŚB 13.4.2.8 と 13.4.3.5 には、楽人が「自ら作った歌を歌う」（*svayaṁsámbhṛtā gā́thā gāyati*）と記されている。上記文例の原文うち、イタリックにした部分の“*iti*”を「『……』といった」と和訳したが、[13] その「……」という空白部分を楽人が自作の歌詞で補完するわけである。[14]

「クシャとラヴァ」との共通点　さて、こうしたヴェーダ文献のアシュヴァメーダ規定を、『ラーマーヤナ』におけるクシャとラヴァの描写と比較する時、双方の明らかな共通性が浮かび上がってくる。つまり、「二人の楽人が、アシュヴァメーダの準備祭の期間中、その祭場において、ヴィーナーを弾きながら吟唱する」ということである。さらにその歌詞について言えば、アシュヴァメーダでは祭主の事績を題材とするが、双子が歌う『ラーマーヤナ』も、アシュヴァメーダ祭主であるラーマの事績を題材とする点で共通している。

以上の検討から、クシャとラヴァの人物像が、アシュヴァメーダ準備祭に規定された「二人のヴィーナーガーティン」を模して作られたことが推知される。ただし、双子の人物像は、細部に至るまでヴェーダの規定に一致しているわけではない。例えば多くのヴェーダ文献は、ヴィーナーガーティンをバラモンと王族のペアとして述べるが、クシャとラヴァの間にそうした区別はない。さらに詞の内容をみると、ヴェーダでは祭祀と会戦という二つのトピックが指定されるが、『ラーマーヤナ』は主人公の生い立ちや結婚、放浪の旅など多様なトピックを包含しているから、ヴェーダの規定と完全に一致するわけではない。おそらく「ウッタラ・カーンダ」の作者は、多かれ少なかれ、アシュヴァメーダの中に「二人のヴィーナーガーティンが祭主を称えて歌う」という儀礼があることを知っていただろう。そしてこの二人のヴィーナーガーティンに、もともと「ウッタラ・カーンダ」の展開に必要であった「ラーマの息子」を重ね合わせる形で、双子の人物像を作っていったと思われる。[15]

---

[12] 祭祀の挙行、およびそれに伴う祭官への報酬贈与の効果は、祭主の死後、天界において享受されると考えられていた。*iṣṭāpūrtá-*の観念の発生と展開については、阪本（後藤）［2015: 71-91］および Sakamoto-Gotō［2000］を参照のこと。

[13] 上記引用文に見るような、不定の対象に言及する *iti* の文献例について、cf. Delbrück［1888: 531-532］。

[14] 歌詞が歌い手の創意に任されている点で、アシュヴァメーダの説話朗誦は、ヴェーダのもう一つの王権祭祀ラージャスーヤで行われるシュナハシェーパ説話の朗誦と対照的である。後者では、ホータル祭官が語る説話テクスト自体が、ブラーフマナの中で定められている（Aitareya Brāhmaṇa 7.13.1-18.9 および Śāṅkhāyana-ŚS 15.17-27）。シュナハシェーパ説話については辻［1978: 3-16］の和訳と解説、朗誦儀式の意義と形態については手嶋［2004］を参照のこと。

[15] なお、『ラーマーヤナ』初巻「バーラ・カーンダ」では、本筋の物語に先立ち、当の叙事詩を創作したヴァールミーキがクシャと

3.3.『ラグヴァンシャ』に描かれたクシャとラヴァ

カーリダーサ（Kālidāsa、4～5 世紀頃）の『ラグヴァンシャ』（*Raghuvaṃśa*: RaghuV）[16] は、ラーマに先立つイクシュヴァーク統の王たちの行状譚をも加えた、美文芸によるラーマ物語である。この作品では、第 15 章（とくに 15.32-98）にクシャとラヴァが登場するが、その役回りは『ラーマーヤナ』で描かれたものとほぼ同じである。ただし作者カーリダーサは双子を、叙事詩のように二人のヴィーナーガーティンのイメージと重ね合わせて描く意図は持っていなかったと思われる。例えばカーリダーサは以下のように、アシュヴァメーダの開催地にやって来たクシャとラヴァが「あちらこちらで」（*itas tatas*）歌うと述べている。その一方で、彼らがアシュヴァメーダの「祭場内」で歌うといった記述はまったく見られない。[17] またここでは、双子の声音が愛らく、かつその美貌がラーマに瓜二つでもあることが強調される。この点では『ラーマーヤナ』の描写と共通する。その半面、『ラーマーヤナ』でたびたび語られていた「ヴィーナーの弾き語り」という行為が、ここでは一度も触れられていない。[18]

その作品から窺う限り、カーリダーサは叙事詩の作者と違って、ヴェーダ祭祀の知識を創作に生かすことにはあまり関心がなかったようである。結果として、彼が描く双子の人物像には、「アシュヴァメーダ祭場で吟唱する」という二人のヴィーナーガーティンとのつながりが見られなくなっている。それでも、双子の活動がもっぱら「『ラーマーヤナ』の吟唱」にとどまる点で、その大まかな人物像は継承されていると言えよう。

４.「吟唱楽人」から「英雄戦士」へと変容する人物像

ところが、この後に作られるラーマ物語のヴァリエーションでは、状況が大きく変わってくる。つまり、「吟唱楽人」というその原型的人物像よりも、勇ましい「英雄戦士」としての新たな人物像が前面に打ち出されはじめるのである。本章ではとりわけ、

（１）「ラーマ物語の吟唱」がどう位置付けられているか
（２）「ラーマと双子の父子対面」がどう描かれているか

という二点に注目し、各作品の記述を見比べる。上記（１）の比較により「吟唱楽人」の要素が形骸化していくことを、そして（２）の比較からは「英雄戦士」としての性格が増大していくことを、その背景とともに確認していくこととする。

4.1『ウッタラ・ラーマチャリタ』に描かれたクシャとラヴァ

バヴァブーティ（Bhavabhūti、８世紀頃）の戯曲『ウッタラ・ラーマチャリタ』（*Uttararāmacarita*: URC、『ウッタラ・ラーマ』）[19] の第 4～第 6 章は、カーリダーサの段階から一変して、双子を勇敢な「英雄戦士」として描き出している。それは、双子のうち特にラヴァにおいて顕著である。ラーマのアシュヴァメーダで放たれた馬がヴァールミーキの棲む森に迷い込んだ時、ラヴァはそれを奪って馬を護衛する軍勢と激戦を繰り広げる（URC 第４～第５幕）。その際、護衛団長を務めるチャンドラケートゥ（ラーマの弟ラクシュマナの子）は、御者であるスマントラとともに、ラヴァの雄々しい戦いぶりを見て、感嘆の声をあげる。そこでは、カーリダーサが描いた「ラーマに瓜二つの容貌」に加え、新たな要素である「ラーマ譲りの卓越した戦闘力」が強調されている。

ラヴァにその吟唱を教え、アヨーディヤーで歌わせる場面が描かれている（Rm 1.4）。ただしそこでは、ラーマのアシュヴァメーダ挙行が語られることはない。町角で歌う双子を見かけたラーマが、好奇心から彼らを王宮に招き、父王ダシャラタの物語を聴き始め、メインストーリーの冒頭部へと移行していく。したがって初巻では双子の様子が、ヴェーダ祭祀ともヴィーナーガーティンのイメージとも結びつきのない形で描かれている。こうした「ウッタラ・カーンダ」との相違が、最終巻の筋書きを明かさずに済ませるための簡略化によるものか、両巻の作者が異なるために生じた齟齬の表れか、現段階ではいずれとも判断しがたい。

[16] ラグヴァンシャ各巻の概要は Kale［1972（1922）: xv-xxiv］に示されている（「クシャ・ラヴァ挿話」を含む第 15 巻の概要は pp. xxii-xxiii にあり）。

[17] RaghuV 15.62-63: vidher adhikasaṃbhāras tataḥ pravavṛte makhaḥ | āsan yatra kriyāvighnā rākṣasā eva rakṣiṇaḥ ‖ 62 ‖ atha prācetasopajñaṃ rāmāyaṇam **itas tataḥ** | maithileyau kuśalavau jagatur gurucoditau ‖ 63 ‖（62. それから、ヴェーダ規定より多くの準備品を具えた祭祀（アシュヴァメーダ）が始まった。そこでは［本来］儀礼の妨害者であるラクシャスたちが護衛をした。63. そして、ミティラー生まれの婦人（シーター）の子であるクシャとラヴァが、師（ヴァールミーキ）の指示を受けて、聖者（ヴァールミーキ）によって創作された『ラーマーヤナ』を、あちらこちらで歌った。）なおヴェーダ文献には、ラクシャスが祭祀を妨害するエピソードがしばしばみられる。例えば『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』は原初のアシュヴァメーダについて次のようにいう。TB 3.8.15.1: prajā́patir aśvamedhám asṛjata. tám sṛṣṭáṃ rákṣāṁsy ajighāṁsan.（プラジャーパティはアシュヴァメーダを創出した。創出されたそれを、ラクシャスたちは害そうとした。）ラクシャスやアスラといった神々の敵対者は、特に主祭日の前夜に襲来すると見られており、それを撃退する意味をもった祭事がしばしば行われる。Cf. Hoffmann［1968: 367-380 = Aufsätze 1975: 207-220］および Amano［2009: 384-391］、さらに Teshima［2011: 92-94］。

[18] RaghuV 15.64-65&67: vṛttaṃ rāmasya vālmīkeḥ kṛtis tau kiṃnarasvanau | kiṃ tad yena mano hartum alaṃ syātāṃ na śṛṇvatām ‖ 64 ‖ rūpe gīte ca mādhuryam tayos tajjñair niveditam | dadarśa sānujo rāmaḥ śuśrāva ca kutūhalī ‖ 65 ‖ vayoveṣavisaṃvādi rāmasya ca tayos tadā | janatā prekṣya sādṛśyaṃ nākṣikampaṃ vyatiṣṭhat ‖ 67 ‖（64. 題材はラーマについて、作はヴァールミーキ、［歌う］二人はキンナラ（妖精）の声。それで聴衆の心を捉えられないなどということがあろうか。65. 二人の容姿と歌の甘美さは、それを知った人々によって［ラーマ］に報告された。興味津々となったラーマは、弟たちとともに［二人を］観て、［歌を］聞いた。67. その時、若さと服装の点で異なるだけの、ラーマと二人のそっくりな様を見て、人々は瞬きもせずに突っ立っていた。）

[19]『ウッタラ・ラーマ』全体のあらすじは辻［1973: 87-89］に紹介されている。そのうち「クシャ・ラヴァ挿話」の部分については、Kale［1982（1934）: 25-26］および Smith［1999a: 113］の内容概観を参照のこと。

URC 5, vv. 2-4

CANDRAKETUḤ: ārya sumantra, paśya paśya:
kirati kalitakiñcitkoparajyanmukhaśrīr
anavarataniguñjatkoṭinā kārmukeṇa
samaraśirasi cañcatpañcacūḍaś camūnām
upari śaratuṣāraṃ ko 'py ayaṃ vīrapotaḥ. [2]
āścaryam.
munijanaśiśur ekaḥ saṃvṛttaḥ sainyasaṅgaiḥ
nava iva raghuvaṃśasyāprasiddhaḥ prarohaḥ
dalitakarikapolagranthiṭaṃkāraghora
jvalitaśarasahasraḥ kautukaṃ me karoti. [3]
SUMANTRAḤ: āyuṣman,
atiśayitasurāsuraprabhāvaṃ
śiśum avalokya tathaiva tulyarūpam
kuśikasutamakhadviṣāṃ pramāthe
dhṛtadhanuṣaṃ raghunandanaṃ smarāmi. [4]

チャンドラケートゥ「貴きスマントラ、見よ、見よ。
2. 誰だかあそこで少年戦士が、少し怒りに赤く染まった美しい顔を輝かせ、その頂で矢弦が絶えずうなる弓でもって、戦いの先頭に立ち、髪の毛の五つの房[20]を揺らしながら、矢の吹雪を諸々の軍勢に浴びせかけている。
驚くべきことだ。
3. 苦行者の子供が一人で、**ラグ王家の未知にして新たな一員が現れたように**、多くの軍勢に取り囲まれながら、軍象の関節を破壊し、弓弦を恐ろしく響かせる炎のような千の矢を放つ。［そんな彼は］私の好奇心を掻き立てる」
スマントラ「長寿を有する者よ。
4. 神々とアスラたちを凌ぐ力を持つ**子供が、このように［ラーマと］等しい容姿であることを見て、私は、クシカの末裔（ヴィシュヴァーミトラ）の祭祀に敵対する者たちを粉砕した際の**[21]**弓持てるラグの子孫（ラーマ）を思い出す**」

父子対面の描かれ方　さて、馬の護衛軍を蹴散らしたラヴァは、次にチャンドラケートゥ（実は父方のいとこ）と相対する。そして、会話する中で自ずと湧きおこる親愛の情を感じつつも、クシャトリヤのならいに従って、戦闘により雌雄を決することとなる（URC 5, vv. 9-36）。ここでバヴァブーティは、舞台に一組のヴィディャーダラの夫婦を登場させ、彼らが上空から見物するという設定で、ラヴァとチャンドラケートゥの戦うさまを実況報告させている（URC 6, vv. 1-7）。こうして二人の接戦が繰り広げられる最中、突然ラーマがやってくる。するとラヴァは、ラーマの威光に打たれてすぐに戦闘をやめてしまう。そしてチャンドラケートゥに、こう語りかける。

URC 6, ll. 40-45 (ad vv. 31-32)

LAVAḤ: candraketo, ka ete.
CANDRAKETUḤ: priyavayasya, nanu tātapādāḥ.
LAVAḤ: mamāpi tarhi dharmatas tathaiva, yataḥ priyavayasyety āttha. kin tu catvārāḥ kila bhavatām evaṃ vyapadeśabhāginas tatra bhavanto rāmāyaṇa-kathāpuruṣāḥ. tad viśeṣaṃ brūhi
CANDRAKETUḤ: nanu jyeṣṭhatātapādā ity avehi.
LAVAḤ: (sollāsam) kathaṃ, raghunātha eva. diṣṭyā suprabhātam adya yad ayaṃ devo dṛṣṭaḥ. (savinayakautukaṃ nirvarṇya) tāta, prācetasā-ntevāsī lavo 'bhivādayate.
RĀMAḤ: āyuṣmann, ehy ehi. (sasneham āśliṣya) ayi vatsa, kṛtaṃ, kṛtam ativinayena anekavāram apariślathaṃ māṃ pariṣvajasva.

ラヴァ「チャンドラケートゥよ、この方はどなたか」
チャンドラケートゥ「親友よ、［私の］父上だ」
ラヴァ「すると、法にしたがって同じく私の［父］でもある。君は［私に］『親友よ』と言ったのだから。[22] ところで、君にとって［父上という］呼び名にふさわしい人、つまりラーマーヤナの物語に出てくる英雄は、知ってのとおり四人いる。そのうち誰なのかを言っておくれ」
チャンドラケートゥ「いちばん年長の父上と知りたまえ」
ラヴァ（歓喜して）「なんと、ラグナータ（ラーマ）その人か。幸運だな、今日は美しい曙に出会った。この神々しい人が見られたのだから。（礼儀正しく、かつ興味深げに見つめて）父上、プラチェータスの子（ヴァールミーキ）の内弟子であるラヴァがご挨拶申し上げます」[23]
ラーマ「長寿を有する者よ、来なさい、来なさい。（愛情をもって抱擁して）ああ坊や、堅苦しい礼儀はもうよい、もうよい。私を何度も強く抱きしめておくれ」

---

[20] アーリャ上位三階級の男子は誕生後一年目か三年目（バラモン）、五年目（クシャトリヤ）、あるいは七年目（ヴァイシュヤ）に結髪式（*cūḍākaraṇa-/cūḍākarman-* あるいは *caula-*）を行う（cf. Śāṅkhāyana-GS 1.28.1-4、Baudhāyana-GS 2.4.1）。頭頂周辺を残す形で髪を剃り、残った髪で房を作る。Cf. MānDhŚ 2.35: cūḍākarma dvijātīnāṃ sarveṣām eva dharmataḥ / prathame 'bde tṛtīye vā kartavyaṃ śruticodanāt //（全ての再生族の結髪式は、法にしたがい［生後］一年目か三年目に、ヴェーダ聖典の規定にならって行われるべきである。）髪の毛の房（*cūḍā-*）の作り方は家系ごとのしきたりに従う（cf. Āśvalāyana-GS 1.17.18、Pāraskara-GS 2.1.22、Khādira-GS 2.3.30、Hiraṇyakeśi-GS 2.1.12）。Baudhāyana-GS 2.4.16 によれば、房（*śikhā-*）の数は一、三、五のいずれかであり、『ウッタラ・ラーマ』の描写は「五つの房」のパターンに準じている。結髪式の式次第については、Hillebrandt［1897: 49-50］の解説を参照のこと。

[21] ヴィシュヴァーミトラの祭祀をたびたび妨害していたラクシャスたちを、少年時のラーマがラクシュマナとともに倒したエピソード（Rm 1.18-29）を指す。とくにその終結部にある次の詩節が『ウッタラ・ラーマ』の表現に近い。Rm 1.29.21: sa hatvā rākṣasān sarvān yajñaghnān raghunandanaḥ / ṛṣibhiḥ pūjitas tatra yathendro vijaye purā //（彼、ラグの子孫（ラーマ）は［ヴィシュヴァーミトラの］祭祀を害する全てのラクシャスたちを殺し、そこで聖仙たちにより称賛された、あたかもかつて［アスラたちに］完勝した際にインドラが［そうであった］ように。）

[22] セリフに「法によって」（*dharmatas*）とあり、「友の父を自身の父と等しくみなす」といった規定が法典類にあることを前提としているようである。ただし、筆者の調査ではそうした規定を見出せていない。

[23] 年長者に対する挨拶について『マヌ法典』は次のようにいう。MānDhŚ 2.122: abhivādāt paraṃ vipro jyāyāṃsam abhivādayan / asau nāmāham asmīti svaṃ nāma parikīrtayet //（年長者に挨拶するバラモンは、挨拶の後に「私は何某と申します」と自分の名前を述べる。）この規定に対する諸註によれば、“abhivādaye 'sau nāmāham asmi”（ご挨拶申し上げます。私は何某と申します）と発話する。『ウッタラ・ラーマ』が描くラヴァの挨拶は、概ねこのしきたりに沿っている。Cf. GautDhS 6.5、ĀpDhS1.5.12、VasDhS 13.44、YājDhŚ 1.26。

このようにバヴァブーティは、やむなく別れて暮らさざるを得なかった父子の初対面を、温かな情景として描いている。また、両者の口から自ずと発せられる親愛の言葉は、まだ明かされていない二人の関係を観衆に暗示している。そしてラヴァの振る舞いは、直前の戦闘場面から一転して子供らしく、かつ礼儀正しい。その点では、この後に登場するクシャも同じである。父子対面の場面に限って言えば、本作品においても、「愛らしい」「礼儀正しい」といった叙事詩以来の双子のイメージは、継承されていると言ってよいだろう。

ラーマ物語吟唱の位置づけ　さて、ラーマとラヴァ、チャンドラケートゥが話していると、そこにクシャがやってくる。そうするうちに、ラーマはその会話から、双子が自分とシーターとの間に生まれた息子であることに気付く（URC 6, vv. 17-28）。 つまり、カーリダーサの段階までは双子によるラーマ物語吟唱を通じて知らされていた事実が、ここでは直接の会話の中で明らかになるのである。その半面、ラーマ物語の吟唱はというと、双子の会話に「ラーマーヤナ」という言葉が出てくるのを耳にしたラーマが、わずか二詩節（URC 6, vv. 31-32）[24] をクシャに歌ってもらうだけである。ここから明らかなように、『ウッタラ・ラーマ』における吟唱は、二人一組での上演でもなく、ヴィーナーの弾き語りでもない。先に見た『ラグヴァンシャ』の吟唱場面と比べても、叙事詩以来の「二人の吟唱楽人」という人物像からは、いっそう遠ざかっている。

「英雄戦士」としての人物像のなりたち

先に見たように『ラーマーヤナ』と『ラグヴァンシャ』は、ラーマの後継者たる資格が双子にあることを、ラーマに似たその容姿への言及によって示していた。これに対し『ウッタラ・ラーマ』は、外見だけでなく武勇の面でも、双子がラーマの美質を受け継いでいることを述べる。総じてこの作品は、双子をラーマ物語の吟唱者としてより、むしろ清新な英雄戦士として描くことで、ラーマの後を継ぐ「有望な次世代」が登場したことを観衆（ないし読者）に印象づけている。こうした人物像の転換がバヴァブーティの創案によるものか、あるいは別の先行作品にならったものかは明らかでない。

ただし本作品と同じく「アシュヴァメーダの馬をめぐって戦闘が起こる」という筋書きは、『マハーバーラタ』の第14巻（*Āśvamedhika-Parvan*「アシュヴァメーダの巻」）以来、インド古典で馴染みのものである。例えば『ラグヴァンシャ』第3章では、ディリーパ王のアシュヴァメーダ挙行に際して、祭馬の護衛を務めるラグ王子が、馬を奪おうとするインドラと激戦を繰り広げる（RaghuV 3.38-69）。そこでは、まさしくラグが武勇により「有望な次世代」として読者（ないし聴き手）に印象づけられていた。『ウッタラ・ラーマ』に見られる「英雄戦士」としての双子の人物像は、「祭馬をめぐる戦闘」に「有望な次世代の活躍」を重ねるという、先行諸作品にあった筋書きを応用する形で作られたと想像される。

4.2.『パドマプラーナ』に描かれたクシャとラヴァ

『パドマプラーナ』（*Padma-Purāṇa*: PdP）[25] の第5巻「パーターラ・カンダ」（*Pātāla-Khaṇḍa*）は、全体がラーマ物語「後日談」の翻案ものとなっている。同書がいつ編纂されたかは定かでないが、内容面では次節に紹介する『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』（12 世紀頃か）と類似しながら、記述はいくぶん簡素な傾向を示す。[26] 差し当たりその年代を8世紀から12世紀の間に見ておいて大過ないであろう。[27] この作品では、前節に見た『ウッタラ・ラー

---

[24] URC 6, ll. 115-120: RĀMAḤ: … (prakāśam) vatsau, rāmāyaṇam iti śrūyate bhagavato vālmīkeḥ sarasvatī- niṣyandaḥ, praśastir ādityavaṃśasya. tatra kautūhalena yat kiñ cic chrotum icchāmi. KUŚAḤ: sa kṛtsna eva sandarbho ’smābhir āvṛttaḥ. smṛtyupastitau tāvad imau bālacaritasyāntye ’dhyāye ślokau. RĀMAḤ: udīrayatu vatsaḥ. KUŚAḤ: prakṛtyaiva priyā sītā rāmasyāsīn mahātmanaḥ. priyabhāvaḥ sa tu tayā svaguṇair abhivardhitaḥ. [31] tathiva rāmaḥ sītāyāḥ prāṇebhyo ’pi priyo ’bhavat. hṛdayaṃ tv eva jānāti prītiyogaṃ parasparam. [32]（ラーマ ……（声高に）「二人の坊や、尊いヴァールミーキから湧きいでたサラスヴァティー（語の女神）［というべき］、日種家系への称賛である「ラーマーヤナ」という［作品名］が聞こえる。 好奇心から、私はそのうちのいくつかを聴いてみたい」 クシャ「その作品は私たちによって、全てきっちり暗誦されている。幼年期の事績［という巻］のおわりの章にある二つの詩節が頭に浮かんできました」 ラーマ「坊やは［それを］吟唱しておくれ」 クシャ 31.「シーターは［その］本質（*prakṛti-*）によって、偉大な魂をもつラーマの愛しかった。彼の［シーターへの］愛情は、彼女自身の美徳（*guṇa-*）によって大きくなった。32. ちょうどそのように、ラーマはシーターとって［自分の］命よりも愛しいものとなった。そしてお互いに、心は愛の絆を分かっていた」）なお、URC 6.31-32 と全く同じ詩節は、少なくとも現行の『ラーマーヤナ』には存在しない。ただし「バーラ・カーンダ」末尾にある次の二詩節はクシャが歌う二詩節と、太字部分の語句が共通する。Rm 1.76.15-16: **priyā** tu **sītā rāmasya** dārāḥ pitṛkṛtā iti / **guṇā**d rūpaguṇāc cāpi **prīti**r bhūyo vya**vardha**ta（Bombay 版 1.77.27: **abhivardha**te）// tasyāś ca bhartā dviguṇaṃ hṛdaye parivartate / antarjātam api vyaktam ākhyāti **hṛdayaṃ** hṛdā //（15. いっぽう**ラーマにとって**、父により授けられた妻たる**シーターは愛しかった**。［彼女の］**美徳**と容姿の美によって、［ラーマの］愛情はますます**大きくなった**。16. そして夫は彼女の心において［夫の心における妻よりも］二倍大きな存在となった。内側に生じた**心**さえが、［口ではなく］心を通じてはっきり語った。）

[25]『パドマプラーナ』全体の内容についてはヴィンテルニッツ［1965: 238-245］を、その文芸史上における特色や他文献との関係については Brockington［2009: 715-718］を参照のこと。

[26]「パーターラ・カンダ」の内容については Koskikallio［1999］および Brockington［2009: 715-717］を、そのうち「クシャ・ラヴァ挿話」の部分については Smith［1999a: 114］の梗概を参照のこと。

[27]『パドマプラーナ』の推定年代についてヴィンテルニッツ［1965: 245］を参照のこと。また『パドマプラーナ』のうち、とくに「パーターラ・カンダ」と他文献との関連については、先行研究の中でいくつか所見が示されている。Shripad Kishna Belvalkar は自らの『ウッタラ・ラーマ』刊本の序章（1915、Harvard Oriental Series vol. 21、pp. lvii-lviii）において、同書が PdP 5.1-68 の物語（ないしそれに近い何らかの伝承）に基づいて作られたと推測する。Brockington［2009: 715］は「パーターラ・カンダ」がカーリダーサやバヴァブーティに依拠した痕跡があると述べている（ただし実際の文献に照らした説明は付されていない）。さらに

マ』よりも、「英雄戦士」としてのクシャ・ラヴァ像がより強く打ち出されている。まず以下に、PdP 5.54 および 60-64 によりながら、その筋書きを辿ってみる。

まず、森で生まれ育った双子のうち、ラヴァがアシュヴァメーダの馬を捉えるところまでは『ウッタラ・ラーマ』と同様である。ただし、そこからの戦闘場面が、『パドマプラーナ』ではずっと激しいものとなる。まず、ラヴァが護衛軍の将士であるカーラジット、プシュカラなどと戦い、いずれも勝利を収める。ところが軍団長シャトルグナとの戦いでは、接戦の末にラヴァが敗れ、地に倒れ落ちる（PdP 5.54-62）。ここでラヴァの友人たちが森へ急行し、上の状況をシーターに伝える。すると、彼女は長男のクシャに弟をすぐに救い出すよう命じる。こうして、今度はクシャが戦場に立つことになる。『ウッタラ・ラーマ』では戦う機会のなかったクシャだが、この作品ではラヴァ以上の活躍を見せる。彼がシャトルグナを挑発する以下のパッセージからは、傲岸不遜ともいえる人物像が浮かび上がってくる。

PdP 5.63.67-72
tadā prakupito ’tyantaṃ kuśaḥ kopaparāyaṇaḥ |
uvāca bhūpaṃ śatrughnaṃ mahābalaparākramam ‖ 67 ‖
jānāmi tvāṃ mahāvīraṃ saṅgrāme jayakāriṇam |
yat tvāṃ nārāyaṇāstraṃ me na babādhe bhayānakam ‖ 68 ‖
idānīṃ pātayāmy adya bhūmau tvāṃ nṛpate śaraiḥ |
tribhiś cen na karomy etat pratijñāṃ tarhi me śṛṇu ‖ 69 ‖
yo manuṣyavapuḥ prāpya durlabhaṃ puṇyakoṭibhiḥ |
tan nādriyeta saṃmohāt tasya me ’stv atra pātakam ‖ 70 ‖
sāvadhāno bhavān atra bhavatu pradhanāṅgaṇe |
pātayāmi kṣitau sadya ity uktvā svaśarāsane ‖ 71 ‖
śaraṃ saṃropayām āsa ghoraṃ kālānalaprabham |
lakṣīkṛtya ripor vakṣo vipulaṃ kaṭhinaṃ mahat ‖ 72 ‖

67. その時、憤りの高まったクシャの怒りは頂点に達し、大地の守護者であり大力と勇猛さを持ったシャトルグナに言った。
68-70.「私は君を、合戦において勝利をもたらす英雄であると知っている。わが恐ろしきナーラーヤナの飛び道具が、君を駆逐しえなかったのだから。人民の主よ、いま私は三本の矢によって、君をこの大地に打ち倒す。わが宣言を聞け。私がもしそうしなければ、得がたき人の身を幾多の善業によって獲得しておきながら、愚かさゆえにそれを粗末にする者として、私はここでその罪を負おう（＝自ら命を捨てて見せよう）。
71-72. この戦場で、君は気をつけろよ。私がすぐさま［君を］地面に打ち倒す」そう言って、広くて堅固で大きな敵（シャトルグナ）の胸に狙いを定めて、終末期に世界を焼く火のような、恐ろしい矢を弓につがえた。

クシャがシャトルグナと一騎打ちを繰り広げるかたわら、弟のラヴァも息を吹き返し、敵軍を蹴散らし始める。最後にはクシャがシャトルグナを倒し、残りの将士も二人で残らず打ち負かしてしまう（PdP 5.63-64）。このように、『パドマプラーナ』における双子の「英雄戦士」としての性格は、先に見た『ウッタラ・ラーマ』に比べ、ずっと強化されている。むろん、後者は劇作品であるから、激しい戦闘場面を長々と提示することに制限があるため、単純に比較することはできない。それでも、後者に比べ前者では、双子のうちラヴァがいったん敗北し、その救援にやって来たクシャが獅子奮迅の活躍をするなど、筋書きがより起伏に富んだものとなっていることは明らかである。

さて、長い戦いに区切りがつくと双子は、矢で射て気絶させたハヌマントとスグリーヴァを戦利品としてヴァールミーキの庵へ持ち帰る。ところが、二匹の猿と旧知の仲であるシーターはそれを見て、すぐに放してやるよう息子たちに命じる。さらに、シーターが祈念すると、戦場に倒れていたラーマの兵たちも息を吹き返す（PdP 5.64）。王宮に戻ってきた兵たちから一部始終を聞き、双子の強さに驚いたラーマは、その住処であるというヴァールミーキの庵を自ら訪ねる。こうしてラーマは、ヴァールミーキの庵にシーターが暮らしていること、また双子が自分とシーターの子であるという事実を知るのである。

ラーマ物語吟唱の位置づけ　次いでラーマは、ヴァールミーキの勧めに従い、双子をアヨーディヤーへと呼び寄せる。そして王宮へやって来たクシャとラヴァは、まずヴァールミーキに促され、ラーマ物語の吟唱をラーマ本人の前で披露することになる。[28] そこでは、前節で見た『ウッタラ・ラーマ』ではほとんど閑却されていた「吟唱楽人」としての人物像が、『パドマプラーナ』では明確に描きだされている。ただしその文脈では、双子がラーマの子であることも、シーターが健在であることも事前に明かされており、その吟唱はいわば余興として行われるに過ぎない。また、二人の吟唱が行われる場所もアヨーディヤーの王宮内であり、アシュヴァメーダ祭場ではない。ここに見られる「吟唱楽人」としての双子の活動は、叙事詩に描かれたものと外見は似ていても、アシュヴァメーダの一儀礼を暗示し、シーターの生存を知らせるという本来の意味合いをすでに失っている。

父子対面の描かれ方　さて、上の吟唱を聴き終えたラーマは、双子に報酬として金品を与えようとする。しかし、バラモンでもない自分たちが報酬を受けることに、双子は戸惑いの言葉を述べる。ここで初めてヴァールミーキが、ラーマこそ彼らの父であることを明かす。

Smith［1999b: 393-394］は、「パーターラ・カンダ」にラーマに対するバクティ信仰が見られるとし、その現形成立をサンスクリット語による最初のバクティ作品『バーガヴァタ・プラーナ』Bhāgavata-Purāṇa（9 世紀頃か）よりも遅いと考える（1200 年から 1300 年の間が妥当とも付記するがその理由は示されていない）。Koskikalio［1999: 241］は、本稿でも扱う『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』との共通点が多くみられるして、それと同時代の編纂である可能性を示唆している。

[28] PdP 5.66.125-128: vālmīkiḥ śrīyutau vīkṣya rāmaputrau mahaujasau | uvāca smitam ādhāya mukhaṃ kṛtvā manoharam ‖ 125 ‖ yuvāṃ pragāyataḥ putrau rāmacaritram adbhutam | vīṇāṃ pravādayantau ca kalagānena śobhitam ‖ 126 ‖ ity uktau tau sutau rāmacaritraṃ bahupuṇyadam | agāyatāṃ mahābhagau suvākyapadacitritam ‖ 127 ‖ yasmin dharmavidhiḥ sākṣāt pātivratyaṃ tu yat sthitam | bhrātṛsneho mahān yatra gurubhaktis tathaiva ca ‖ 128 ‖（125. ヴァールミーキは、笑みを浮かべて顔を魅力的にし、王権の威光と大威力を持った二人のラーマの息子を見て言った。126.「汝ら二人の息子はヴィーナーを鳴り響かせ、柔らかな歌声で飾られた驚くべきラーマの事績を歌いなさい」127. そう言われて、この大いなる才能をもった二人の息子は、よい語句がちりばめられ、［その聴聞によって］多くの功徳があるラーマの事績を歌った。128. その際、法に適った規則とは何か、夫への忠節とは何かが目の当たりに示され、そこには偉大な兄弟間の思いやり、そして師への絶対的な帰依も同様に［示された］。

PdP 5.66.138-141

ity uktavantau tau dṛṣṭvā vālmīkiḥ kṛpayāyutaḥ |
aśaṃsad yuṣmat pitaraṃ jānītāṃ nītivittamau ‖ 138 ‖
iti śrutvā muner vākyaṃ bālakau nṛpapādayoḥ |
lagnau vinayasaṃyutau mātṛbhaktyātinirmalau ‖ 139 ‖
rāmo bālau dṛḍaṃ svāṅge parirabhya mudānvitaḥ |
mene svīyau tadā dharmau mūrtimantāv upasthitau ‖ 140 ‖
sabhāpi rāmasutayor vīkṣya vaktre manorame |
jānakīpatibhaktitvaṃ satyaṃ mene munīśvara ‖ 141 ‖

138. そう［戸惑いを］述べる彼ら二人を見て、憐憫の情にかられたヴァールミーキは告げた。「最も思慮に富む二人は、［ラーマを］汝らの父であると知れ。」
139. その苦行者の言葉を聞いて、母への信愛を具え、大変無垢であり、礼儀正しさを具えた二人は、王の両足に触れた。[29]
140. 喜びを感じたラーマは、二人の少年を自らの体にしっかりと抱き取って、自分の特質が二つの形をとってそばに立っているのだと、その時思った。
141. 会衆もまた、ラーマの息子たち各々の、愛らしい顔に目を凝らし、ジャナカの娘（シーター）による夫への信愛は真実であると思った。苦行者の主よ。

このように『パドマプラーナ』のラーマ物語でも、先に見た『ウッタラ・ラーマ』と同じく、わけあって別々に暮らしてきた父子の対面が、温かな交情の場面として描かれている。父に対する礼儀をわきまえ、会衆の目に愛らしく映るクシャとラヴァの姿は、基本的に叙事詩以来の双子のイメージを踏襲していると言ってよい。

ところが、次に扱う『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』では、こうした父子対面の描かれ方が一変する。そこには、双子がラーマ物語の吟唱をラーマ自身に聞かせる場面はなく、もっぱら英雄戦士としての活躍が語られる。父ラーマと対面するのも戦場においてである。そして注目すべきは、そこでの双子がラーマとも武力での対決に至ることである。次節ではこうした新たな人物像の展開が、『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』という作品自体の主題と呼応する形で生じたことを確認したい。

4.3.『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』に描かれたクシャとラヴァ

『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』（*Jaiminīya-Aśvamedha*：JA、以下『ジャイミニーヤ』と略）[30] の現形が成立したのは 12 世紀頃と目されているが、そこに見られる各種の挿話には、より古くから流布していたものもあると思われる。その書名は、聖仙ヴィャーサに付託される叙事詩『マハーバーラタ』とは別に、その弟子のジャイミニが作った別ヴァージョン、いわゆる「ジャイミニーヤ・マハーバーラタ」（あるいは「ジャイミニ・バーラタ」）がかつて存在したという伝説に拠っている。その失われた大叙事詩の中で、ただ一つ後世に残った巻が「アーシュヴァメーディカ・パルヴァン」、つまり本書だというわけである。もちろん、実際にジャイミニ作の「マハーバーラタ」が全体として存在したとは考えにくい。そうした伝説をまといながらも、本書は実態として、ヴィャーサの『マハーバーラタ』から第 14 巻のメインストーリーを取り出し、そこに独自の翻案を施し、あるいは新たな挿話を織り交ぜる形で作られたものと思われる。

同書も『マハーバーラタ』第 14 巻と同じく、戦争で多くの親族を殺したことを嘆くユディシュティラに対し、ヴィャーサが、あらゆる罪を除去する祭祀アシュヴァメーダの挙行を勧める場面に始まる（JA 1）。『マハーバーラタ』では、ここで祭の挙行費用を得るために太古の王マルッタの財宝を捜索する話となるが、『ジャイミニーヤ』では特別な条件を備えた祭馬を獲得するためにビーマらが奔走することになっている（JA 2-13）。その後はオリジナルの筋書きどおり、祭馬がハスティナープラから放たれ、諸国を放浪し始める。そして馬が敵対者に捕らえるたび、護衛長のアルジュナが戦闘の末にそれを奪還することが繰り返される（JA 14-21）。[31] その道中、馬がアルジュナ自身の息子バブルヴァーハナが治めるマニプラという町に差しかかる。はじめ、息子は父を歓待しようとするが、支配地を侵されて戦おうとしない者はクシャトリヤではないと面罵されたため、憤然として父に戦いを挑む（JA 22）。[32]

この「父子対決」という場面に至った時、物語の語り手であるジャイミニが、かつてラーマもその息子と戦ったという話に触れる。そして、聴き手のジャナメージャヤがさらに詳しく聞きたいと望むところから、クシャ・ラヴァ挿話の披瀝が始まる。[33]

---

[29] アーリャ上位三階級においては、ヴェーダ学習の師をはじめ尊敬すべき人の足に触れることを礼儀とする。その所作について『マヌ法典』は次のように述べる。MānDhŚ 2.72: vyatyastapāṇinā kāryam upasaṃgrahaṇaṃ guroḥ / savyena savyaḥ spraṣṭavyo dakṣiṇena ca dakṣiṇaḥ //（手を交差させた姿勢によって。師の［足］の把持がなされるべきである。［弟子の］左［手］によって［師の］左［足］が、［同様に］右によって右が触れられるべきである。）Cf. BaudhDhS 1.3.25、ĀpDhS 1.5.19-22、GautDhS 1.52。

[30]『ジャイミニーヤ・アシュヴァメーダ』の大まかな内容はヴィンテルニッツ［1965: 284-286］に紹介されている。また『マハーバーラタ』プーナ批評版第 19 巻（Āśvamedhika-Parvan）序文では、『マハーバーラタ』第 14 巻「アーシュヴァメーディカ・パルヴァン」と『ジャイミニーヤ』双方の内容が、比較対照表の形で詳しく示されている（pp. xxiv-xliv）。『ジャイミニーヤ』の年代、文芸史上での特色については、cf. Koskikallio&Vielle［2001］、Smith［1999b］および Brockington［1998: 492-493］。なお、『ジャイミニーヤ』の成立年代は 12 世紀頃とされることが多いが、8 世紀～12 世紀頃に推定される『パドマプラーナ』の方が先行するとは一概に言えない。Koskikalio［1999: 241］が示唆するように、両書は何らかの共通伝承から派生した、ほぼ同時代の作品であるかもしれない。本論が扱ったクシャ・ラヴァ挿話についても、両書が示す差は年代の違いではなく、当該物語が置かれる外枠物語の相違によるものと考えても矛盾はない。

[31] この部分のすじがきは MBh 14.72-85 のそれに対応する。

[32] この部分は MBh 14.78-82 に対応する。

[33] JA 25.1-3: jaiminir uvāca: saṃgrāmas tv abhavad rājan babhruvāhanapārthayoḥ | yathā kuśasya rāmasya vājimedhahaye dhṛte ‖ 1 ‖ janamejaya uvāca: kathaṃ rāmaḥ kuśaṃ putraṃ śamayac charavṛṣṇibhiḥ | kathaṃ ca tena putreṇa jito rāmo raṇājire ‖ 2 ‖ rāmo na vetti svaṃ sūnum etan me vistarād vada | yasmād rāmakathā vipra sarvapātakanāśinī ‖3 ‖（ジャイミニは言った。1.「ところで王よ、バブルヴァーハナとパールタ（アルジュナ）の戦いは、アシュヴァメーダの馬が［クシャとラヴァに］押しとどめられた際の、クシャとラーマの［戦い］のようであった」ジャナメージャヤは言った。2-3.「ラーマはどのように息子のクシャを矢の雨によって鎮圧したのか、またどのようにラーマは戦場でその息子により打倒されたのか。ラーマは自分の息子だと知らなかったのか。私にそれを詳しく語ってください、聖者よ。ラーマ物語は全ての罪を消去してくれますから」）

ラーマ物語吟唱の位置づけ　この後、第 25 章から第 28 章までの三章では、『ラーマーヤナ』の「ウッタラ・カーンダ」と同じく、ラーマによって森に捨てられたシーターがヴァールミーキの庵で双子を産み育てる様子が描かれる。そこには、二人がヴァールミーキから習ったラーマ物語の吟唱を、人々に披露する場面も見られる。[34] ただしそこでは、二人のうちヴィーナーを奏して歌うのはクシャだけであり、ラヴァはもっぱら拍子をとることになっている。アシュヴァメーダの「二人のヴィーナーガーティン」とのつながりは、ここでも失われていると言えよう。しかも、この吟唱は森に住む聖仙たちに聴かせたものであり、ラーマ自身の前でそれを披露することはない。また、ラーマは吟唱を聴くまでもなく彼らの出自をじかに尋ね、その返答から事実を知ることになっている。このように、本書では双子の「吟唱楽人」という要素が、『パドマプラーナ』のそれと同じく、物語展開の上でとくに必要なものではなくなっている。

父子対面の描かれ方　いっぽう二人の「英雄戦士」としての活躍は、第 29 章から第 36 章まで、じつに七章にわたって展開される。戦闘開始までの成り行きは『パドマプラーナ』の場合とほぼ同じである。まずラーマがアシュヴァメーダを挙行することになり、アヨーディヤーから祭馬が放たれる（JA 29.38-61）。やがて森にやってきた馬をラヴァが奪い、対抗する軍団をことごとく打ち負かす。しかし団長であるシャトルグナとの戦いでは、奮闘むなしくラヴァが敗れる。シャトルグナは意識不明となったラヴァを戦車に乗せ、そのまま馬とともに立ち去る（JA 29.62-30.44）。

さて、ラヴァが連れ去られたことを森の少年たちから聞いたシーターは、クシャに弟の救出を命じる。馬の護衛軍を発見したクシャは多数の将兵をなぎ倒し、シャトルグナをも打倒してラヴァを救出する（JA 31.2-32.7）。双子が馬を連れ去った後、護衛軍の生き残り兵がラーマのもとに急行し、シャトルグナの敗北を知らせる。そこでラーマに命じられたラクシュマナが、大軍を率いて双子の討伐に向かう。シャトルグナとの戦いで弓を壊されていたラヴァは、ここで太陽神スーリャに祈り魔法の弓を授かる。そしてクシャとともに敵将を次々に破り、ラクシュマナを打ち倒す（JA 32.8-34.35）。ついで派遣されたバラタとハヌマントも双子に打ち負かされ、とうとうラーマ自身が戦場にやってくる（JA 35.1-36.35）。ここでラーマは双子にその出自を尋ねるが、それに対し、クシャはきわめて反抗的な態度をとる。

JA 36.40-44:

kuśa uvāca.
kim asmadīya kathayā vaṃśajodbhavayā nṛpa |
kṣātraṃ pauruṣam utsṛjya kathyate tvād ṛśyair janaiḥ || 40 ||
śīghraṃ yudhyasva rājendra vilambaḥ kriyate katham |
na turaṅgo hy asmadīya ucyatāṃ vātha yudhyatām || 41 ||
iti vākhyaṃ tayoḥ śrutvā rāmo ’vocad viśāmpate |
na kariṣyāmy ahaṃ yuddhaṃ bhavān kathayatāṃ kulam || 42 ||
kuśa uvāca.
kevalaṃ suṣuve sītā kṣamāśīlau ca nau vane |
āvayoḥ kṛtavān sarvaṃ jātakarmādikaṃ muniḥ || 43 ||
upaninye ca vālmīkir vedaṃ samyag apāṭhayat |
tathā rāmasya caritaṃ sanmanonirvṛtipradam || 44 ||

クシャは言った。
40. 「我々の家系や出生に関する話をして何になる、王よ。クシャトリヤの勇敢さを放り出し、汝のような者たちによって［それは］話される。
41. すぐに戦え、王中のインドラよ。なぜそう腰が引けるのか。我らの馬に口出ししないか、さもなければ戦うかだ」
42. という双子の言葉を聞いて、人民の主よ、ラーマは言った。「私は戦うことはしないだろう。あなたは家柄を述べたまえ」
クシャは言った。
43. 「森において、シーターは独りで、忍耐強い我ら二人を生んだ。苦行者が、誕生式を初めとして、我ら二人の全ての［人生儀礼］を行った。[35]
44. そしてヴァールミーキがウパナヤナ [36] を行い、ヴェーダをくまなく暗誦させた。また同じく、全聴衆に至福をもたらすラーマの事績を［暗誦させた］」

上に見たクシャの言葉の末尾に、ヴァールミーキから双子がラーマ物語の吟唱を教えられたことが言及されている。しかしラーマは何ら関心を示さず、双子もそれを実際の吟唱に結びつけることはしない。つまりこの作品では、吟唱楽人としての双子の活動が、ラーマと関わる場面から全く消えていることになる。

クシャはその後も、ラーマを強い口調で挑発しつづける。そこでは「力（*śakti-*、女性名詞）がないぞ、ラーマ。それは汝によって森に捨てられたか」（JA 36.47c-d: na śaktir vidyate rāma sā tyaktā kiṃ tvayā vane）といったように、母シーターをラーマが森に捨てたことへの当てこすりも差し挟まれる。いっぽうラーマは、双子の母親がシーターだというクシャの言葉を聞いて、彼らが自分の子供であることに気づく。ショックを受けたラーマは双子との交戦を避けようとするものの、自分以外の兵がみな斃されたところで、とうとうラーマも双子と戦わざるを得なくなる。しかしラーマが放つ矢は全て双子に射落とされ、逆に双子の矢はラーマを圧倒していく。そして最後に、ラーマを打ち負かした双子がその装身具を戦利品として奪い取るに至る。[37]

---

[34] JA 29.33-34: tasmād rāmacaritraṃ taj jagatur madhurasvanau | lavas tāladharaś cāsīd vīṇāhastaḥ kuśo jagau || 33 || ālāpair gaganaṃ sarvaṃ vyāpnutāṃ śṛṇvatāṃ manaḥ | tatas te munayo hṛṣṭāḥ sādhu sādhv iti cābruvan || 34 ||（33. それから、甘美な声色を持つ二人は、かのラーマの事績（*rāmacaritra-*）を歌った。ラヴァは［打楽器で］拍子をとり、そしてクシャがヴィーナーを手に歌った。34. 諸々の語りによって、二人は天空全体と聴衆の心を満たした。そこで、彼ら聖仙たちは歓喜し、「すばらしい、すばらしい」と言った。）

[35] アーリャ上位三階級の男児が経るべき人生儀礼全般について Hillebrandt［1897: 41-68］と Keith［1925: 366-378］を参照のこと。

[36] ウパナヤナ（ヴェーダ学習への入門式）の概要について Hillebrandt［1897: 50-53］と Keith［1925: 369-370］、儀礼の意義について梶原［2003］を参照のこと。

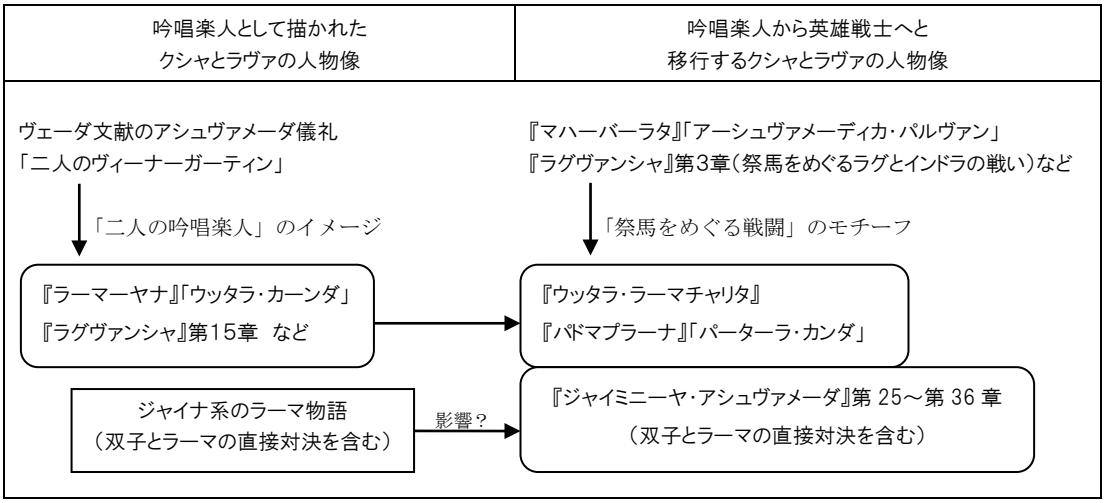
[37] JA 36.60cd-63: evaṃ tadābhavad yuddhaṃ lokavismayakārakam || 60 || dṛṣṭvā tulyaṃ balaṃ samyag bālayo raghunandanaḥ | sītāvadanavad vaktrau dṛṣṭvā bāṇaiś ca tāḍitaḥ || 61 || papāta rathanīḍe ’tha mūrcchito janamejaya | tataḥ kuśalavau jñātvā mūrcchitaṃ jānakīpatim || 62 || samuttīrya rathāt tasmāj jagṛhāte ’sya kuṇḍale | keyūraṃ kaṇṭhahāraṃ ca lakṣmaṇasyāpi maṇḍanam || 63 ||（60cd. この時、こうして［父子間の］戦いは世界を驚愕させるものとなった。61. 諸々の矢に打たれたラグの子孫（ラーマ）は、二人の少年の力が全く［自分と］互角であることを見て、またシーターの面差しをもつ二人の顔を見て、62. そこで気絶して戦車の内部に倒れた。ジャナメージャヤよ。するとクシャとラヴァは、ジャナカの娘（シーター）の夫が気絶したことを知り、63. その戦車から引きずり出して、彼の両の耳輪、腕輪一つとネックレス一つを奪った。［先に倒した］ラクシュマナの装身具も［奪った］。）

このように本作品での双子は、『ウッタラ・ラーマ』や『パドマプラーナ』のそれと一変して、ラーマに強く敵対し、打倒してさえいる。こうした人物像は、『ジャイミニーヤ』という作品の文脈によく適合している。本節の初めで述べたように、この作品は『マハーバーラタ』第 14 巻の翻案ものである。そこでのクシャ・ラヴァ挿話は、メインストーリーでアルジュナがその息子バブルヴァーハナと戦うことになった際に、「父子対決」の先例として披瀝される一挿話であった。従って、双子が父ラーマと対立し戦闘に及ぶという筋書きも、このメインストーリーに合わせたものと言える。

ジャイナ系ラーマ物語の「父子対決」エピソード　なお、ラーマがその息子たちが戦うエピソードは、ジャイナ系ラーマ物語の諸作品にも見られる（ジャイナ系作品でラーマは「パドマ Padma」と呼ばれる）。[38] 例えば、7 世紀後半にラヴィシェーナ（Raviṣeṇa）が作った『パドマチャリタ』（*Padma-Carita*、PCR）第 100～第 104 章には、ラーマ物語のうち後日談にあたる物語が収録されている。ただし、そこにはラーマのアシュヴァメーダ挙行譚はなく、ヴァールミーキも登場しない（従って双子によるラーマ物語の吟唱場面もない）。

森に捨てられたシーターを保護するのはヴァジュラジャンガ（Vajrajañgha）という王であり、ラヴァ（ジャイナ系作品ではラヴァナ Laṇava）とクシャ（同じくアンクシャ Añkuśa）はその王都パウンダリカプリーで生まれ育つ（PCR 100）。双子は無敵の戦士の英雄戦士となり世界征服を果たす（PCR 101）。ある日、彼らを訪ねてきたナーラダ仙が「汝らはラーマとラクシュマナに匹敵する栄光を得た」と称賛した。その言葉を聞いて、自分たちに並ぶものがいることを許容し難いと考えた二人は、ラーマとラクシュマナを討つためにアヨーディヤーを襲撃する（PCR 102.1-174）。そしてまずラクシュマナを打倒し、次いでラーマに立ち向かう。ラーマが九射とラヴァ相手に苦闘しているところへナーラダ仙がやって来て、双子がラーマの息子であると告げる。そこでラーマは彼らと和解し、ラーマの臣下たちも喜んで彼らを迎え入れることになる（PCR 102.175-103.62）。

文献年代の上では『ジャイミニーヤ』や『カターサリト』よりこの『パドマチャリタ』、およびその手本となったヴィマラスーリ Vimalasūri のマハーラーシュトリー語による作『パウマチャリヤ』（*Paüma-Cariẏa*、３～５世紀頃か）が先行する。[39] そのため、前二者が後者の中にある「父子対決」のエピソードに、何らかの経路で影響を受けている可能性はある。ただし、ジャイナ系作品のクシャ・ラヴァ挿話は、本稿でとり上げる諸作品と筋書きが大きく異なっており、似通っているのはほぼ「父子対決」の場面だけである。現段階では、「父子対決」のエピソードがジャイナ系ラーマ物語に起源をもつ可能性を指摘するにとどめたい。



５．『カターサリト』のラーマ物語と先行諸作品との関係

独自的要素の成り立ち　『カターサリト』のラヴァ・クシャ挿話は短く、また記述も簡素であるが、そこには上の各章で見た他のヴァリエーションにはない独自の要素が豊かに示されている。そのうち主なものとして、以下の三つを挙げることが出来よう。

［A］二人のうちクシャが草で創出され、ラヴァの弟となる話（KSS 9.1.86-92）
［B］リンガを玩んだ償いにラヴァがクベーラ神の園から花を盗む話（KSS 9.1.95-99）

なお、戦いの勝者が敗者の持ち物を略奪することは、法典で適法とされている。例えば『マヌ法典』は次のように述べる。MānDhŚ 7.96: rathāśvaṃ hastinaṃ chatraṃ dhanaṃ dhānyaṃ paśūn striyaḥ / sarvadravyāṇi kupyaṃ ca yo yaj jayati tasya tat //（戦車、馬、像、日傘、財貨、穀物、家畜たち、女たち、全ての財物と非金属とは、それを勝ち得た人のものである。）

[38] クシャ・ラヴァ挿話を含む主なジャイナ系ラーマ物語の年代については De Clercq［2005: 597-599］、そこでのクシャ・ラヴァ挿話の概要については Smith［1999a: 108-109］を参照のこと。なお、H. Jacobi による *Paümacariẏa* 校訂本（Prakrit Text Society Series no. 6, 1962）に付された V. M. Kulkarni のイントロダクションには、ジャイナ系ラーマ物語諸本の関係、および個々の年代に関する詳しい解説がある（pp. 1-8）。

[39] この二作品のほか、８世紀の編纂と目されるスヴァヤンブーデーヴァ Svayambhūdeva の『パウマチャリウ』Paümacariü 第 81～82 章にも上記の PCR 101-102 と共通するクシャ・ラヴァ挿話が存在する。これも年代的には『ジャイミニーヤ』や『カターサリト』に先行すると思われる。

［C］ラヴァがプルシャメーダのための犠牲として捕えられる話（KSS 9.1.100-102）

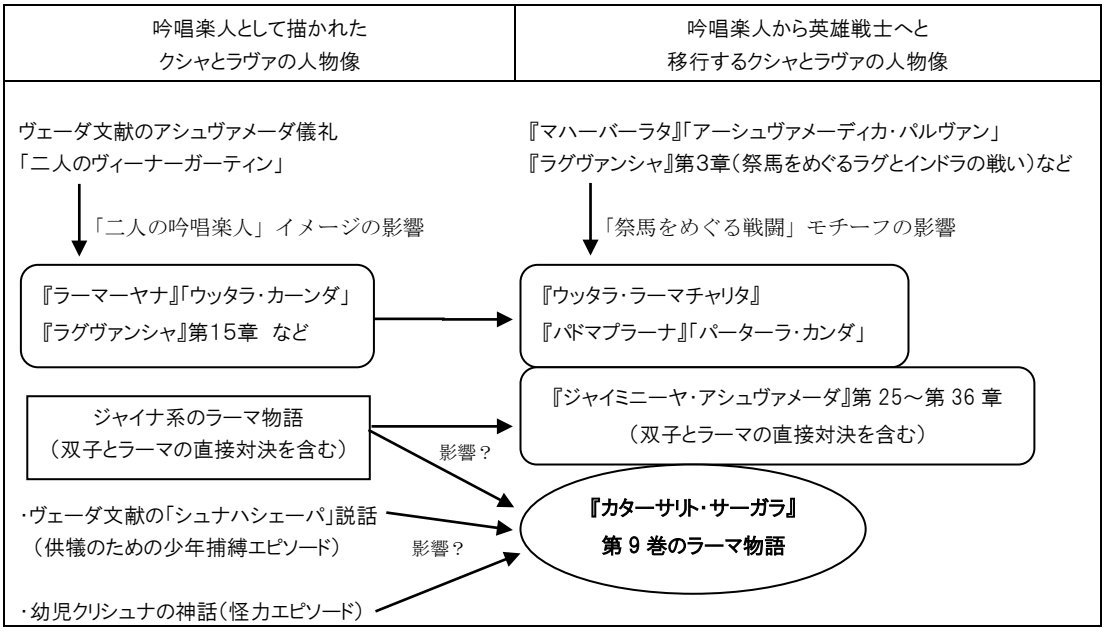
このうち［A］は、クシャが同音のクシャ草から誕生したという、一種の語呂合わせに基づく小話である。クシャ草はヴェーダの祭祀において清めの効果を持つとされ、[40] 祭事執行者を浄化する祭具「パヴィトラ」（*pavitra-*）の材料となる。KSS 9.1.89d に見える「パヴィトラ［に等しい］、我欲［という汚れ］を離れた坊や」（*pavitraṃ nirmame 'rbhakam*）という表現は、これを前提としている。なお、叙事詩以来、双子は「苦行者の子ども」として描かれており、「苦悩を離れた」（Rm 7.84.12d: *vigatajvarau*）、「大変無垢な」（PdP 5.66.139d: *atinirmalau*）といった修飾語を付されることはしばしばあった。［A］の小話は、「クシャ」という音の符合とともに、双子とクシャ草とに共通する「浄性」のイメージを意識しながら作られたものと推測される。

［B］では、ラヴァとクシャの怪力が印象づけられる。大きな石で出来たリンガをおもちゃにし、クベーラの手勢であるヤクシャたちを殺して花を盗み取っている。こうした「怪力を発揮する子ども」というモチーフは、クリシュナの幼児期を描いた神話に見られる（Bhāgavata-Purāṇa 10.8-15）。とくに、母ヤショーダーにいたずらを咎められ、紐で石臼に繋がれたクリシュナがその臼を引きずって二本の木を倒した話が有名である。アガやデーヌカなどの悪魔も多く殺害しており、ラヴァとクシャの振舞いとやや似通っている。はっきりしたことは分からないが、［B］の要素が、同時期に存在していた「幼児期のクリシュナ」を描く何らかの神話に影響を受けている可能性はある。

［C］が示す「供犠にするために少年を捕縛する」というモチーフは、ヴェーダ文献に収められた「シュナハシェーパ説話」（*śaunaḥśepa- ākhyāna-*）に見出される。[41] プルシャメーダ（*puruṣamedha-*）[42] とは、アシュヴァメーダを基本形とするヴァリエーションの一つであり、主要犠牲を馬から人間に置き換え行われるものである。先に見たとおり、双子の物語は叙事詩の段階からラーマが挙行するアシュヴァメーダと結びつけられていた。『カターサリト』では、その祭がプルシャメーダに置き換えられている。おそらく［C］の要素は、こうした二つの祭の互換的性格を生かしつつ、少年が人身供犠のために捕えられるという古譚「シュナハシェーパ物語」の場面と、『ジャイミニーヤ』に見られるような「敵によるラヴァの捕縛」（JA 30.40-44）という場面を結びつける形で生みだされたと想像される。

伝承史上の位置づけ　こうした独自の諸要素がソーマデーヴァの創作によるものか、あるいは何らかの先行伝承を取り入れたものかは不明である。その点はひとまず措くとしても、『カターサリト』に見る「ラヴァ・クシャ挿話」の成り立ちについて、概ね以下のことが推測される。『カターサリト』のラヴァ・クシャ挿話は、「英雄戦士」としての双子像を強調する、発展したタイプのクシャ・ラヴァ挿話（つまり第３～第４章で扱った諸作品と同類のもの）を基礎にしている。その上で、［A］のように語呂合わせを織りこんだクシャ誕生の小話を取り入れ、また［C］のようにヴェーダ祭祀や古い説話の知識を足掛かりにした改変を施している。さらには［B］のように、「怪力をもつ幼児」というクリシュナ神話を思わせるエピソードもある。

ただし、それら独自的要素を別にすれば、その物語は、『ジャイミニーヤ』のヴァージョンに比較的近い。例えば、ラヴァが敵に連れ去られ、それをクシャが救出しにいくという筋書きは、現存する古いヴァリエーションの中で『ジャイミニーヤ』（JA 30-31）にのみ見られる。また、クシャが父ラーマと直接戦うに至ることも『ジャイミニーヤ』（JA 35-36）と共通する。ただし、『ジャイミニーヤ』の年代が 12 世紀頃と目されることが多く、それ自体が 11 世紀の『カターサリト』の手本になりえたかどうか不確かである。差し当たり、『カターサリト』の挿話が『ジャイミニーヤ』のクシャ・ラヴァ挿話か、あるいはそれに近い何らかの先行伝承を手本としたものと想定しておく。



[40] クシャ草 Desmostachya bipinnata（しばしばダルバ草 *darbha-*と同等視される）は清浄なものとされ、ヴェーダ祭祀では、祭壇に置かれる草束（*barhiṣ-*、cf. Sen［1978: 95］）、祭事用の箒（*veda-*、cf. Sen［1978: 108］）、そしてパヴィトラ（祭事用の水を清めるフィルター、*pavitra-*、cf. Sen［1978: 83-84］）の材料として使われる。

[41] Cf. Aitareya Brāhmaṇa 7.15.8-16.2。シュナハシェーパ説話は Aitareya Brāhmaṇa 7.13.1-18.9 とほぼ同じテクストが Śāṅkhāyana-Śrauta-Sūtra 15.17-27 にも収録されている。説話の内容については辻［1978: 3-16］の和訳と解説を参照のこと。

[42] プルシャメーダについては、Hillebrandt［1897: 153］、Keith［1925: 347-348］の解説を参照のこと。

付論：『カターサリト』のラーマ物語が後代作品に及ぼした影響

ソーマデーヴァの手になるラヴァ・クシャ挿話は短く簡素なものであったが、おそらくその外枠物語である『カターサリト』の名声が高まるにつれ、12 世紀以降のインドで広く知られるようになったと想像される。そして、こうした動きを背景に、やがて『カターサリト』のエピソードが、様々なラーマ物語の中へ組み入れられるようになる。その一例として、作者不明の『アーナンダ・ラーマーヤナ』（*Ānanda-Rāmāyaṇa*: ĀnRm、以下『アーナンダ』、14 世紀～18 世紀のいずれか）が挙げられる。[43] この作品は、同時代に知られていた様々なラーマ物語を一つに統合しようと試みた点に特色をもつ。同書で、ラーマ物語の後日談は第５巻「ジャンマ・カーンダ」（Janma-Kāṇḍa）[44] という章に収録されている。そのうちクシャ・ラヴァ挿話の部分を見ると、本稿で見てきた諸作品の要素が、一連の筋書きとして結び合わされていることが分かる。先行諸作品における類似エピソードとの対応とともに、その構成を示せば以下のようになる。

『アーナンダ・ラーマーヤナ』クシャ・ラヴァ挿話（ĀnRm 5.4-5.7）の構成

ĀnRm 5.4.21-31:	シーターによる一児の出産	Cf. KSS 9.1.88-90
ĀnRm 5.4.61-75:	ヴァールミーキによる別の一児の創出	Cf. KSS 9.1.88-90
ĀnRm 5.4.76-83, 5.7.11-23:	双子によるラーマ物語の吟唱	Cf. Rm 7.59-85 RaghuV 15.62-67 PdP 5.66
ĀnRm 5.6.1-64:	ラヴァによる蓮の花盗み	Cf. KSS 9.1.95-99
ĀnRm 5.7.47-64:	ラヴァによる祭馬の奪取と護衛軍との戦い	Cf. URC 5-6 PdP 5.54-62 JA 29-30
ĀnRm 5.7.87-91:	ラクシュマナによるラヴァの捕縛	Cf. KSS 9.1.100-102
ĀnRm 5.7.107-123:	クシャによるラヴァの救出と敵軍の打倒	Cf. PdP 5.63-64 JA 31-36 KSS 9.1.103-105
ĀnRm 5.7.124-135:	クシャとラーマの直接対決	Cf. JA 36.33-66 KSS 9.1.106-111

こうした『カターサリト』にあるエピソードの取り入れは、『アーナンダ』に限らず近世の地方語ヴァージョンにも見られる。例えば、18 世紀から 19 世紀にかけてカシュミーリー語で編まれたディヴァーカラ・プラカーシャ・バッタ（Divākara Prakāśa Bhaṭṭa）のラーマ物語 [45] には、独立した巻として『ラヴァ・クシャ戦闘の事績』

[43] Ragavan［1988: 120-121］は、作品中に出てくる地名や王朝名等を手掛かりに、17 世紀末から 18 世紀初めにかけての編纂を示唆する。Koskikallio［2002: 314, fn. 6］は Raghavan を含む諸学者の見解を踏まえつつ、西紀 1400 年ごろを最も妥当と見る。『アーナンダ』全体の内容は、Ragavan［1988: 72-119］で章ごとに詳しく紹介されている。

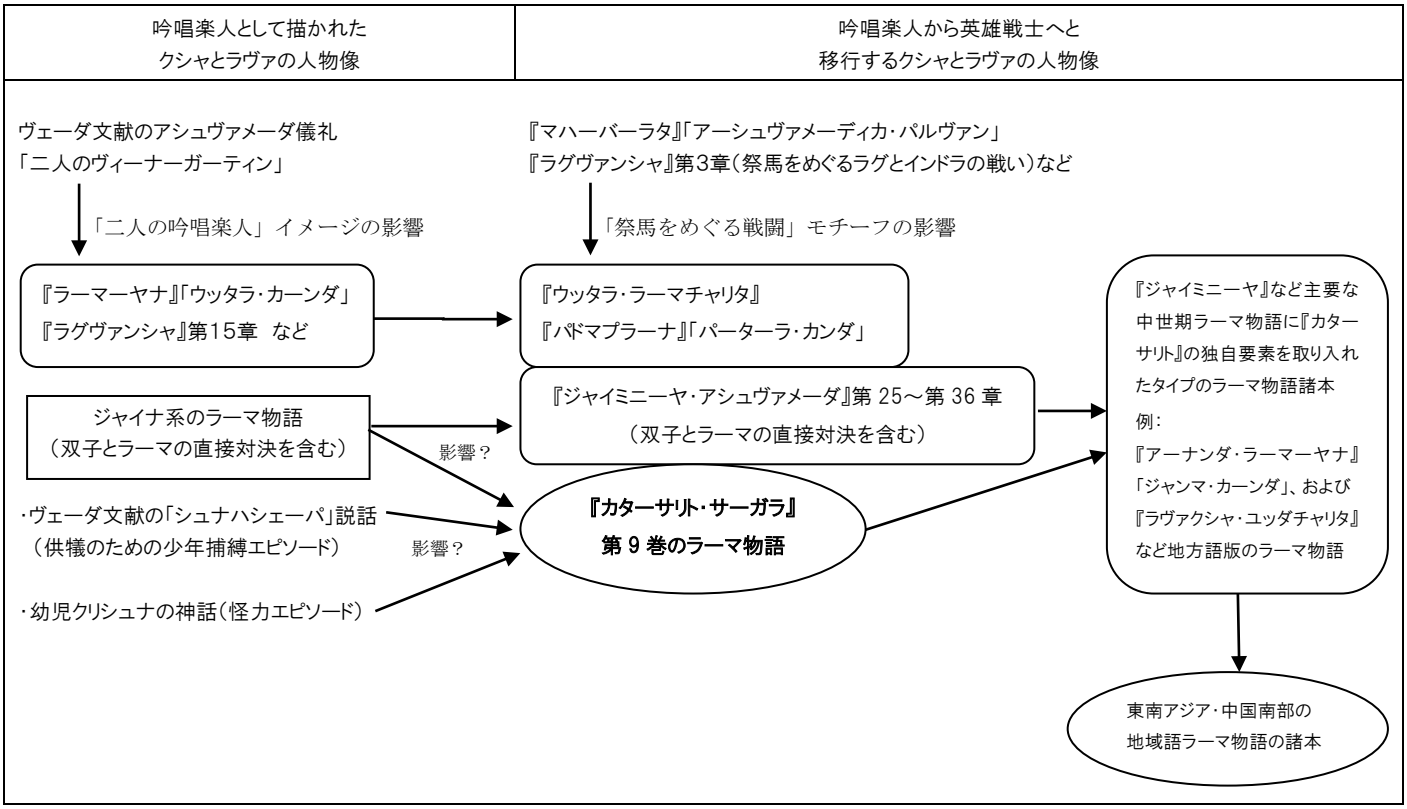
[44]『アーナンダ』「ジャンマ・カーンダ」の内容については Ragavan［1988: 97-102］、Smith［1999a: 110-112］の要約を参照のこと。

[45] *The Kāshmīrī Rāmâyaṇa comprising the Śrirāmâvatāracarita and the Lavakuśayuddhacarita of Divâkara Prakāśa Bhaṭṭa: Edited with an Introduction and Summary of the Poem in English* (*Bibliotheca Indica: a Collection of Oriental Works*, no. 253a). Sir George A. Grierson

（*Lavakuśa-Yuddha-Carita*、LYC）が付されている。そこには、ヴァールミーキによる草からの一児創造という『カターサリト』中のエピソードが挿入されている。シーターはヴァールミーキの隠棲処で、まずラヴァのみを出産する（LYC 1258-1282）。そしてある日、シーターはラヴァの泣き声が苦行者の瞑想を邪魔してしまうと考えて、赤ん坊を隠棲処の外へ連れ出す。そこで赤ん坊が獣に攫われたと勘違いしたヴァールミーキが、クシャ草からラヴァのレプリカを創出する（LYC 1283-1303）。このような事例は、プラカーシャ・バッタの作品に限らず、おそらくインド内の多様なラーマ物語[46] の中にいくつも存在するものと思われる。

さらに、東南アジアのラーマ物語を調査した大野徹氏らの諸研究（参考文献一覧を参照）によれば、「ヴァールミーキによる一児創出」というエピソードは、マラヤ語『ヒカーヤト・スリー・ラーマ』（*Hikayat Seri Rama*）、タイ語『ラーマキエン』（*Ramakien*）、クメール語『リアムケー』（*Reamker*）、ユアン語『グヴァイ・ドヴォラビ』（*Gvay Dvorabhi*、ラオス）、ビルマ語『アラウン・ヤーマ・タージン』（*Alaung Rama Thagyin*）、傣語『蘭嘎西賀』（中国雲南省）などに含まれている。

それらがインド側のどのようなソースに基づいて編まれたかは不明であるが、『カターサリト』の影響を受けた何らかのラーマ物語を手本にしたことが推察される。わずか 50 詩節余りの短編ではあるが、『カターサリト』に見られるラーマ物語の影響は、南アジアから東南アジア、中国南部にいたる様々な地域・言語のラーマ物語に及んでいる。



略号

ĀnRm = *Ānanda-Rāmāyaṇa*, Delhi: Parimal publications, 2006 (Parimal Sanskrit Series 89) / ĀpDhS = *Āpastamba-Dharma-Sūtra*, see Olivelle［2000］/ BaudhDhS = *Bhaudhāyana-Dharma-Sūtra*, see Olivelle［2000］/ GautDhS = *Gautama-Dharma-Sūtra*, see Olivelle［2000］/ GS = Gṛhya-Sūtra / JA = *Jaiminīya-Aśvamedha*, Gorakhpur: Gita Press, 2007 [bokk title: *Jaiminīya Mahābhārata (Āśvamedhika Parva)*] / KSS = *Kathāsarit-Sāgara*, ed. Pandit Durgāprasād & Kāśīnāth Pāndurang Parab / MBh = *Mahābhārata*, ed. V. S. Sukthankar *et al.* (Poona critical edition) / LYC = *Lavakuśa-Yuddha-Carita*, ed. G. A. Grierson, Calcutta: 1930 (Bibliotheca Indica, A Collection of Oriental Works: Work no.

(ed.). Calcutta: Royal Asiatic society of Bengal, 1930.

[46] Smith［1999a: 115-123］は、地方語で編まれたラーマ物語のうち、まとまった形でクシャ・ラヴァ挿話を含むものとして次の諸本を紹介している：*Lavakuśar Yuddha* of Haribara Bipra (Assamese, date unknown), Guvāhāṭi: Assamese Sāhitya Sabha, 1959 (cf. Smith 1999a: 116, fn. 3; 1999b: 389, ft 2); *Sītār Banabāsa* of Gaṅgādhar (Assamese, date unknown), Nalbālī: Dattabaruvā eṇḍ Kompāni, 1975; *Bṛhat Jaiminī Bhārata* of Indramaṇi Sāhu (Oriya, date unknown), Dharmagranth Ṣṭār, Kaṭak n.d. pp. 233-262; *Rāmāẏaṇa Uttarakāṇḍa* of Kṛttibās (Bengali, 14-15c), ed. by Hīrendranāth Datta, Calcutta, 1901 (cf. Smith 1999a: 116, fn. 6); *Lavakuśa-Khāṇḍa* in Rāmāyaṇa of Bhānubhakta (Nepali, 19c. CE): Eastern Book Linkers, 2008; The 14th parvan in *Aṣṭādās Parba Asamīẏa Mahābhārata* of Gaṅgadās, Bhavanidās and Subuddhi Rāẏ (Assamese, 18c.), ed. by Harinārāẏaṇ Dattabaruvā (reprint), Guvāhāṭi: Harinārāẏaṇ Dattabaruvā, 1993. このほか Brockington［2009: 716, footnote 10］によれば Gobind Singh 作 *Rāmāvātāra*（17 世紀）にもクシャ・ラヴァ挿話が含まれているという。

253, Issue no. 1509, New Series) / MānDhŚ = *Mānava-Dharma-Śāstra*, see Olivelle［2005］/ PCR = *Padma-Carita* [= *Padma-Purāṇa*], ed. Pannalal Jain, New Delhi: Bharatya Jnanpith (Moortivedi Jain Granthamala: Sanskrit Grantha no. 26) / PdP = *Padma-Purāṇa*, ed. K. D. Vedavyas (Chowkhamba Sanskrit Series 124) / Rm = Rāmāyaṇa, ed G. H. Bhatt (Baroda critical edition) / RaghuV = Raghuvaṃśa ed. C. R. Devadhar / ŚB = *Śatapatha-Brāhmaṇa Mādhyandina*, ed. A. Weber / ŚS = Śrauta-Sūtra / TB = *Taittirīya-Brāhmaṇa*, ed. Rājendralāla Mitra (Bibliotheca Indica: Collection of Oriental Works, vol. 31) / URC = *Uttararāmacarita*, ed. S. Pollock (The Clay Sanskrit Library) / VasDhS: Vasiṣṭha-Dharma-Sūtra, see Olivelle［2000］/ YājDhŚ: *Yājñavalkya-Dharma-Śāstra*, ed. Narayan Ram Acharya.

参考文献

ヴィンテルニッツ，モーリツ（Winternitz, Moriz）.

1965. 『叙事詩とプラーナ』中野義照（訳）（『インド文献史』ウィンテルニッツ著 中野義照（訳）第２巻）．高野：日本印度学会．（原著 Winternitz, Moriz. *Geschichte der indischen Literatur. Bd. 1: Einleitung, Der Veda, Die volkstümlichen Epen und die Purāṇas*. Leipzig: C. F. Amelangs. 1920）.

大野　徹．（下掲 Ohno, Toru も参照のこと）

1993. 「東南アジアのラーマーヤナ：インドネシア・マレーシア・フィリピンの伝承」　『大阪外国語大学アジア学論叢』3 : 37–70.

1994. 「東南アジアのラーマーヤナ（２）：タイ，カンボジア，ラオスの伝承」『大阪外国語大学アジア学論叢』4 : 255-308.

1995.「東南アジアのラーマーヤナ（３）: ビルマ（ミャンマー）の伝承」『大阪外国語大学アジア学論叢』5: 139–186.

1996. 「『蘭嘎西賀』と東南アジア版ラーマ物語」．金子量重先生古希記念論集刊行委員会（編）『アジアの民族造形文化』．東京：徴蔵館．78-89.

1996.「モン語版ラーマーヤナ『ロイク・サモイン・ラーム』の特徴」.『東南アジア研究』34-2: 370-386.

1996.「ラオス版ラーマ物語の内容とその特徴」.『東京外大東南アジア学』2: 17-38.

1996.「東南アジアのラーマーヤナ（４）: 雲南省傣族の蘭嘎西賀」.『大阪外国語大学アジア太平洋論叢』6 : 211–264.

1998.「東南アジアのラーマーヤナ（５）スンダ語版『バタラ・ラマ』」.『大阪外国語大学アジア太平洋論叢』8 : 209-234.

1998.「ビルマのラーマーヤナ：その特徴と周辺諸語版との関係」．金子量重，坂田貞二，鈴木正崇（編），『ラーマーヤナの宇宙：伝承と民族造形』（慶應義塾大学地域研究センター叢書）．東京：春秋社．164-197.

2000.『東南アジア諸語版「ラーマーヤナ」の比較研究』．大阪外国語大学東南アジア古典文学研究会．

2001.「ランナータイのラーマ物語『ホーラマーン』—その内容と特徴」.『アジア太平洋論叢』11：7-37.

梶原三恵子

2003.「入門式（Upanayana）と再入門式」.『印度學佛教學研究』　52-1: 473-471=(22)-(24) .

金子量重，坂田貞二，鈴木正崇（編）.

1998. 『ラーマーヤナの宇宙：伝承と民族造形』（慶應義塾大学地域研究センター叢書）．東京：春秋社.

阪本（後藤）純子.

2015.『生命エネルギー循環の思想：『輪廻と業』理論の起源と形成』（RINDAS 伝統思想シリーズ 24）．京都：龍谷大学現代インド研究センター.

辻直四郎.

1972.『サンスクリット文学史』（岩波全書 277）．東京：岩波書店.

1978.『古代インドの説話：ブラーフマナ文献より』．東京：春秋社.

土田龍太郎.

2017.『大説話ブリハットカター』（中公選書 025）．東京：中央公論新社.

手嶋英貴.

2000.「アシュヴァメーダにおける説話朗誦の発展史 —パーリプラヴァ朗誦とヴィーナー奏者の歌—」.『仏教文化研究論集』4: 33-62.

2004.「古代インドのものがたり儀式：ヴェーダ祭式における『ものがたり』の形態と意味」.『説話・伝承学』12: 121-134.

2012.「アシュヴァメーダの馬をめぐる祭式学的思考の展開 —祭式における『理念と現実の隔たり』をどう埋めるか—」.『インド論理学研究』5: 301-320.

林　隆嗣.

2011.「ヴィーナーの喩え（Vīnopama）とインド音楽理論 —パーリ註釈文献の源泉資料に関連して—」.『パーリ学仏教文化学』25: 1-24.

Amano, Kyoko.

2009. *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II: Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Bremen: Hempen.

Brockington, John.

1998. *The Sanskrit Epics* (*Handbuch der Orientalistik*, Abt. 2: Indien, Bd. 12). Leiden/Boston: Brill.

2009. “The Rāmāyaṇa in the Purāṇas”. Robert P. Goldman & Muneo Tokunaga (eds.), *Epic Undertakings (Papers of the 12th World Sanskrit Conference 2)*. Delhi: Motiral Banarsidass. 703-730.

De Clercq, Eva.

2005. “The Paümacariya - Padmacarita - Paümacariu: The Jain Rāmāyaṇa-Purāṇa”. Petteri Koskikallio (ed.), Mislav Ježić (general ed.). *Epics, Khilas, and Purāṇas: Continuities and Ruptures: Proceedings of the Third Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, September 2002*. Zagreb: Croatian Academy of

Sciences and Arts. 597-608.
Delbrück, Berthold.
1988. *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhauses.
Dumont, Paul-Emile.
1927. *L'aśvamedha: description du sacrifice solennel du cheval dans le culte védique d'après les textes du Yajurveda blanc (Vājasaneyisaṃhitā, Śatapathabrāhmaṇa, Kātyāyanaśrautasūtra)*. Paris/Louvain: P. Geuthner.
Hillebrandt, Alfred.
1897. *Ritual-Litteratur: Vedische Opfer und Zauber* (*Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde*, Bd. 3, Heft 2). Strassburg: K.J. Trübner.
Hiltebeitel, Alf.
2011. *Reading the Fifth Veda.* Vishwa Adluri & Joydeep Bagchee (eds.), *Studies on the Mahābhārata—Essays by Alf Hiltebeitel 2*. Leiden/Boston: Brill.
Hoffmann, Karl.
1968. "Die Komposition eines Brāhmaṇa-Abschnittes (MS I 10. 14-16)". *Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou* (*Publications de l'Institut de civilisation indienne*, série in-8o, fasc. 28). Paris: E. de Boccard. 367-380.
Horsch, Paul.
1966. *Die vedische Gāthā- und Śloka-Literatur*. Bern: Francke Verlag.
Kale, Moreshvar Ramchandra.
1972 (first published in 1922). *The Raghuvaṁśa of Kālidāsa: With the Commentary Sañjīvanī of Mallinātha: Cantos I-V. Edited with a Literal English Translation, Copious Notes*. Delhi: Motiral Banarsidass.
1982 (first published in 1934). *The Uttararāmacarita of Bhavabhūti: Edited with the Commentary of Viraraghava, Various Readings, Introduction, a Literal English Translation, Exhaustive Notes and Appendices*. Delhi: Motiral Banarsidass.
Keith, Arthur Berriedale.
1925. *The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads* (*Harvard Oriental Series*, vols. 31-32). Cambridge/Mass.: Harvard University Press.
Koskikallio, Petteri.
1999. "The horse sacrifice in the Pātālakhaṇḍa of the Padmapurāṇa". Mary Brockington & Peter Schreiner (eds.), Radoslav Katičić (general ed.). *Composing a Tradition: Concepts, Techniques and Relationships: Proceedings of the First Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, August 1997*. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts. 227-243.
2002. "The *Gargasaṃhitā* and the *Ānanda-Rāmāyaṇa*: additional sources for studying the pseudo-Vedic ritualism in post-epic texts". Mary Brockington (ed.), Radoslav Katičić (general ed.). *Stages and Transitions: temporal and historical frameworks in epic and purāṇic literature: Proceedings of the Second Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, August 1999*. Zagreb: Croatian Academy of Sciences and Arts. 313-336.
Koskikallio, Petteri & Vielle, Christoph.
2001. "Epic and Puranic Texts Attributed to Jaimini". *Indologica Taurinensia* 27: 67-93.
Ohno, Toru.
1997. "Burmese, Laosian and Yunnan Versions of Rama Story". L. P. Vyas (ed.). *Ramayana around the World*. 31-48.
1998. "The Ramayana in Southeast Asia". *Journal of the Institute of Asian Studies*. 15: 21-31.
1999. *A study of Burmese Rama Story: with an English translation from a duplicate printing of the original palm leaf manuscript written in Burmese language in 1233 year of Burmese era (1871 A.D.)*（大阪外国語大学学術研究双書24）. 箕面：大阪外国語大学学術出版委員会.
Olivelle, Patrick.
2000. *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmásāstra; With the Editorial Assistance of Suman Olivelle*. New Delhi: Oxford University Press.
2005. *Dharmasūtras: The Law Codes of Āpastamba, Gautama, Baudhāyana, and Vasiṣṭha; Annotated Text and Translation*. Delhi: Motilal Banarsidass.
Raghavan, Venkatarama.
1988. *Sanskrit Rāmāyaṇas other than Vālmikī's: the Adbhuta, Adhyātma, and Ānanda Rāmāyanas*. Chennai: Dr. V. Raghavan Centre for Performing Arts.
Sakamoto-Gotō, Junko.
2000. "Das Jenseits und iṣṭā-pūrtá- "die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten" in der vedischen Religion". Bernhart Forssman & Robert Plath (eds.), *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*. Wiesbaden: Reichert Verlag. 475-490.
Sen, Chitrabhanu.
1978. *A Dictionary of the Vedic Rituals: Based on the Śrauta and Gṛhya Sūtras*. Delhi: Concept Publicher Co.
Smith, William L.
1999a. "Variants of the Kuśalavopākhyāna". *Categorisation and Interpretation, Indological and comparative studies from an international Indological meeting at the Department of Comparative Philology* (*Meijerbergs Arkiv för svensk ordforskning* 24). Göteborg: Göteborg University. 107-123.
1999b. "The Jaiminibhārata and its eastern vernacular versions". *Studia Orientalia* 85: 389-406.

Teshima, Hideki.
2008. *Die Entwicklung des vorbereitenden Rituals im Aśvamedha aus gehend von der Darstellung im Vādhūla-Śrauta-Sūtra*. Berlin: Logos Verlag.
2011. "Mythological Background of the "Fort of the Gods" Built at the Aśvamedha Prescribed in the Old Śrauta-Sūtras of the Taittirīya School". *Journal of Indological Studies* 22&23: 87-96.
Zin, Monika.
2004. "Die altindischen viṇās". Ellen Hickmann & Ricardo Eichmann (eds.). *Musikarchäologie IV: Musikarchäologische Quellengruppen* (*Orient-Archäologie*). Bonn: Leidorf. 321-362.